二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
平成27年6月1日発行第12巻第3号通巻95号
定価1080円
成年向け雑誌

cover illustration by ちょびぺろ

今号の特集
丸呑み

肉と肉が密着する
快楽と粘液の悦空間

連載&読み切り小説
新連載 新居佑×コザ
大熊狸喜×しゅんぞう
蒼井村正×牡丹
清水勝治×泡盛一太朗
酒井仁×ごや
ヤミヨ×天地争覇
千夜詠×ちょびぺろ

えっちマンガ&4コママンガ
楠木りん
天海雪乃
からすま弐式
ひぐちいさみ
ぱふぇ
冬扇
おおたたけし
嘉納あいら

カラーピンナップ
うるし原智志
ぼっしい
梶山浩
ちょびぺろ

立ち読み版

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

vol.82
2015 06

二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE

丸呑み危険地帯
Foolish Swallowing Danger Zone
～女賞金稼ぎスライム責め～
小説 NOVEL／千夜詠（せんやよみ）
挿絵 ILLUSTRATION／ちょびぺろ
粘液まみれのおぞましき
肉壁に包まれた気高きバウンティハンター！

猛獣だらけのサファリパークに、一人置き去りにされたよりもたちが悪い。
荷電粒子銃の安全装置を解除しつつ、ステラはそんな風に思いながら、だがしかし、遊園地にやってきた子供のようにワクワクしていた。
十数年前に放棄された小規模都市には、人の気配はまるでなかったが、代わりに異形の生物がそこらじゅうを徘徊しているときた。
Ｓクラスの危険地帯で、高額奉仕のお仕事真っ最中というのに、命懸けのスリルを楽しんでしまうのは、バウンティハンターという輩の性かもしれない。
廃ビルの三階から、しつこく追ってきていた甲殻類を人型にしたような化け物。そいつに銃口を向けて狙いをつける。
――高い銃なんだから、効いてよね。
最初に強襲を受けた時には、サブウェポンであるオートマグナムを弾いた相手だ。こいつで駄目なら打つ手がなくなる。
とにかく嗅覚が鋭い。それでも対象の反応速度を考えれば、ギリギリまで引きつけたい。
ポロっと背後でコンクリートの破片が落ちる音がした。直感はあったが、今は無視だ。
悠々と通りを歩く化け物をターゲットに捕捉し、トリガーを引くタイミングをはかる。
正面直下でそいつは立ち止まり、ギロリと視線をこちらに向けた。
まだだ。
危険に対して本能的に焦る気持ちを押さえつけ、その瞬間に集中する。
刹那、飛び上がった化け物が一気に目の前に到達した。逸る鼓動。だが、思考は冷静さを保ち、
ズギューン！　鎌のような爪がステラの柔肌に届こうかという直前、ビームの閃光が真っ赤な甲殻の胸を貫いた。
砲圧に絶命しながら離れる化け物を確認するよりも早く、ステラは即座に身を回転させる。
シャーッ！　食人植物の花弁が背後に迫っていたのだ。
音もなく忍び寄ってきた異形に感付いたのは、幾多の修羅場を潜り抜けてきた者の勘。
迫る巨大な口に目掛け、ハンドボムを投げつけると、ステラは窓から飛び出した。
ズゴゴゴ――ッ！　爆音が響き、爆炎が弾ける。
焼け焦げる臭いを嗅ぎながら、対ショックシューズの機能も確かに、降り立った女賞金稼ぎは、ゴーストタウンの路地裏に姿を消した。

＊

エリア２９２９と呼ばれるこの一帯は、十数年前に突如現れた生体兵器らによって占拠され、その後、決定的な対策も打てぬままに放棄された場所である。
どういうわけか、その一帯からは離れようとしなかった化け物どもの性質上、近づかないのが得策と判断され、脅威認定されておらず、隔離地域指定されるに留まっていた。
とはいえ、人が近づけば、即座に攻撃を仕掛けてくる生体兵器ばかりのエリア２９２９に喜んで入り込もうとする者などいない。
そんなＳクラス危険地帯にステラが潜入を果たしたのが、五時間前のことである。
それは組合を通さない直接の依頼だった。
名の売れたバウンティハンターにとっては珍しいことではない。
女性のバウンティハンターは数が少なく、そのうえで、赤い髪のショートカットの美女は目立つ存在だった。
豊満な質量感のある乳房に、引き締まった腰周り、たわわな肉付きも形良い臀部。それらを漆黒のライダースーツに包めば、美しく官能的なボディラインが浮き出て、男性なら生唾を飲み込みながらじっくりと視線で舐め回したくなるだろう。
肝心の腕もまた一流。組合で公表されている獲得賞金のランキングでも常に十位以内に位置しているのだから。
一週間ほど前に接触してきた男は、普段はあまり交流のないインテリな役人風の男だった。
軽い口調でステラの美貌を褒め称えるこの男のやけに鼻につく香水に眉を顰めながらも、提示された報酬の高額さに興味を持った。胡散臭さはあったが、エリア２９２９への侵入と聞かされて、熱くなってしまったのも事実。
指定された施設へ赴き、あるデータを入手してきて欲しいというその依頼を引き受けたのは、Ｓクラス危険地帯への挑戦が魅力に思えたからだ。
この辺りの夕陽は、かなり巨大に見えた。
予め(あらかじ)得ていた情報によれば、生体兵器らには、昼夜は関係ない。そうなると、どうしても視覚に頼らざるをえない人間であるステラとしては、明るいうちに目標の施設に入っておきたかった。
気掛かりもある。
エリアへ侵入する直前に、蜃気楼の向こうに見えた何か巨大な存在だ。それが、実際にこの場所に来てみると確認できていないのだ。
時折起こる地響きも不気味に思えた。
全ては勘であって、確証のあるものではなかったが、こういった時の胸騒ぎはだいたい当たるものだ。ハンドボムも大方使い切って、荷電粒子銃のエネルギー残量も少なくなってきている。急いだほうが良さそうだ。
「ここが、目的の……、研究施設のようだけど……」
外観は何げない高層ビルであったが、まだ生きたままのエレベーターで地下に降りると、そこは真っ白な壁に囲まれた区画になっていた。

ハンドナビを頼りに辿り着いたのは、地下三階の機密ブロック。依頼主から頂戴していた疑似網膜、疑似指紋で認証扉を通過した頃には、少々拍子抜けした気分になる。

「旧世代のセキュリティとはいえ、こうもあっさりと……。まあ、外にいる連中のほうが、余程手ごわいってことでしょうけど」

ここまで入り込めば、このエリア２９２９の中で、最も安全な場所といえた。

最終目的地の部屋に入り込むと、ステラは、荷電粒子銃を腰に戻し、一台のコンピューター端末の前に立つ。

「これね……」

携帯の端末にデータを吸い上げようと繋ぐその時、これだけの報酬を払ってでも危険なエリアから持ってこさせようとしている物が何であるか興味が湧いてしまった。

難なくセキュリティを突破して、閲覧に成功する。

すると、そこに表示されたものに、息を呑んだ。

――これは……軍事機密⁉　バイオウェポンって……、そんな、それじゃぁ……。確かにここの怪物どもは、あきらかに人為的に造られた物だけど、それを作っていたのが、まさか、この国の政府だったなんてね。

これは国際条約に違反する。しかも軍事転用を視野にいれたものとなれば、発覚すれば世界的な大問題になるのは間違いないだろう。

――私が持っている荷電粒子兵器のように、最新の武器なら、近い将来には、ここの生体兵器を一掃することができるようになる。そうしてここが解放される前に、証拠を消してしまいたかったのでしょうけど……。

データはコピーではなく、移動させて欲しいという依頼だった。実際には破壊してしまったほうが手っとり早いのに、わざわざ入手させるのには、おそらくまだこいつを利用する気があるのだ。

一人の人間としての正義感。賞金稼ぎとしての報酬。その狭間に立ちながら、考えを巡らせるが、やはり、

「そうね、データを改ざんしてから渡しましょ」

最も自分らしい結論を出したその時だった。

ゴゴゴゴ……。これまでよりも一層激しい地鳴りに、施設全体が大きく揺れる。

――地震？　で、でもこれって……。

近くでミサイルでも撃ち込まれたような衝撃に、鍛え抜かれた彼女でさえ、立っているのがやっとになった。

そして、次の瞬間、

「しまっ――っ！」

床が割れ、ステラの肉体は更に地の底へと落ちていったのだ。

＊

完全に光の届かない暗闇。少し身体を捻るだけで、ぬるぬるとした壁にぶつかり、生暖かい空気と濃い湿気が充満していた。

そこがステラの落ちた場所だった。

「な……に、ここは……、生臭いし……」

ごみ溜めにでも落ちたのだろうか。身体を動かすと、直ぐに柔らかな壁――それは柔らかく、弾力は粘膜のような生々しい生物的なもの――にぶつかってしまい、身動きは難しい。

幸い荷電粒子銃を腰から取り出すことはできて、一か八か壁をぶち抜こうかと考えたその時、ぽうっと淡く青白い光が辺りを照らしだした。

「え……、灯り？　っ！　な、なんなのっ……ここは……」

紅い粘膜の壁はやはり全身に迫るように取り囲んでいた。だが、微かな顫動（せんどう）を見せていて、そう、それは生命であることを現わしていた。

ぞっとする考えが頭に浮かんだ。

「なによ、ここ……、まさか……」

ずるずると這いずるような音がして、ゲル状のものが胸元に落ちてくる。

「ヒ……っ」

それは発光していた。固体になり損ねたスライム。灯りの源はこれだった。

「ソウ…サ、ココ……ハ、巨大生体……兵器……ノ胃……ノ中ダヨ」

声が聞こえた。プルプルと震えるスライムから発せられた気がする。

「大……変ダナ、アア、大変……ダ」

間違いない。半球状のそれは、一部を空洞にして、そこで空気を震わせ、音に変えているのだ。

――こいつ、知性があるの？

しかし、光源はこれだけではない。

ハッとして狭い周囲を見回すと、粘膜壁の瘤状のものから幾つものスライムが這い出してくる。

「久シ……ブリ……ノ獲物……カ」

「女ダ。イ……イ女……ダ」

「ズルズル……シテエ……ナ」

状況はなんとなく把握できた。巨大な生体兵器に足下から呑み込まれ、一気にそいつの胃袋まで落とされたのだ。

エリア２９２９に侵入する前に見た巨大な影を思い出す。その正体がきっとこいつ。そして、地中に隠れながら、呑み込む機会を窺われていたのだ。

だがこいつらはいったい何だ？

不定形な体を波打つように動かしながら移動するスライムがまた一体、ステラの肩に落ちてきた。

「く……、き、気色悪い……。なんなの、お前らは……？」

目的は分からないが、次々と現われるスライムら

著者近刊　『言霊使いリザ 淫獄儀式の学園』『隷属ツンメイド 引っ越し祝いになってあげるんだからっ！』『俺の妹は中二病デレ 吸血姫な妹に吸い尽くされちゃう！』『お嬢様官能小説家 波戸笑』『マゾってはいけない変態女子寮』ほか
好評発売中！

の全てが、自分に向けて這い寄ってくる。
「同ジ……同ジナ……ンダヨ」
「元……ハ人……間。コ……コノ研……究者ダッ……タ」
肩や腕に落ち、足下から太股に上がってくるそいつらは自分たちが元は人間で、この研究施設の研究者だと主張してきた。
彼らの話を纏めると、この巨大な生体兵器の開発中の事故により暴走させてしまい、生き残ったプログラムに従い、こいつは人を襲い呑み込む。幸い活動範囲が限定されているのも、プログラムにそう指示されているからだ。
そして最初に餌食となった彼ら研究者は、開発中であった新薬で肉体の完全消化を免れるものの、意識だけが残ったスライムと化したのだった。
「ちょ、ちょっと、冗談じゃないわ。じゃあ、こんなところにいたら、私……こいつに消化されて……」
流石に焦って、銃口を粘膜壁に向ける。
「止メナ……ヨ。コ……ンナ場所デソ……ンナ……ノ撃ッタ……ラ、暴発シ……テ、ソノ瞬間、ア……ノ世イ……キダ」
「く……っ」
本当に打つ手はないのだろうか？　絶望に混乱しそうになったその間にも、ズルズルと這い寄ってくるスライムが、全身に纏わりついてくる。
「き、気持ち悪い……、くっつかないで……。ひゃっ！　ちょ、ちょっと……」
半透明なゲル状が纏わりついた場所から、黒いライダースーツが溶け始めている。
鍛え抜かれながらも、白くきめ細かで繊細そうな素肌が、徐々に露出してきて、羞恥心を覚えずにはいられなかった。
身体中を蛞蝓のようにゆっくりと移動する彼らには、知性があって、元が人間の男性であったという事実が、それを増幅させてしまう。
「ヒヒ……、ホラホラ、裸ニ、剥イ……チマウゾ」
「何年ブ……リダ。女ノ……身体……ヲ堪能ス……ルノハ。エ……ロイ体ツ……キシヤ……ガッテ」
煽るような言葉までかけてくるスライムに、頭にきながら、引き剥がそうと掴む。すると、指はぐしゃっとゲル状に潜り込むだけで、彼らは痛がることすらない。
「ホラホラ、モウ、オッパイ……ガ見エ……テクル。ヤラシ……イ牛ノヨ……ウナデカチチ」
虫食いのように、ぴたりと肉体に張りついたスーツの生地のいたる所に穴が空いて、太股に、お尻に、腹部、そして豊満な乳房の肌が見えてしまう。
「ヒ……っ、い、いや……」
僅かに身悶えるようにする動きに胸の肉果実がぷるぷると揺れて、その頂にまで露出部が広がっていった。
スライムから分泌される液が柔肌を光沢色に滑られ、薄桃色の乳輪が見えてくる。そして然程の時間もかけずに、男勝りな女賞金稼ぎのイメージとは違う可憐な乳首が曝け出されてしまった。
「う……、な、何の為に、こんな……」
ぬるぬるとした感触が、恥ずかしい性感帯を覆っていて汚辱感を覚える。ジャングルの奥地の洞窟などでは、無数の虫だらけの通路を歩いたりもしたが、その時とは気持ち悪さの質が違う。
「ヤッパ……リ、女……ノ身体ハ気持チ……イイナア」
「ナニ、助ケ……テヤロ……ウッテ思ッ……テネ」
「ソウソウ、俺……達ハコ……イツノ胃液デ……ハ溶ケ……ナイカラ……。ホラ、コウヤ……ッテ、全身……ヲ覆ッテヤ……レバ」
生体兵器の胃液が分泌されだすと、数時間それは続き、内容物を溶かし始める。しかし、それでも溶けなかった場合、栄養素にならない異物と判断されて外に排出されるらしい。
――確かに、これなら、生き残れるチャンスはある。で、でも……。
「だ、だけど、どうして、服っ、溶かすのよ。ひゃ！」
胸元に張りついたままの数匹が乳房を捏ねるように蠢きだした。
女と分って愛撫するような動きに、牡の劣情と更なる気色悪さを感じ、全身が強張ってしまう。
だからといって、こいつらを引き剥がすわけにもいかなかった。
――こ、こいつら、好き勝手にして……。くっ、うう、でも、が、我慢しなくちゃ……。
外に排出されるまでの我慢だ。生き残る。それが今優先すべきことである。
「緊張シ……テル？」
「身体……硬イ。コ……レジャ、駄……目ダ。ナラ……コレ……デ……」
チクッとほんの一瞬、乳首に痛みが走った。
「い……っ、な、何をしたの？　ふぁ……ぁ」
途端に鼓動がとくんくんと高鳴りだし、乳腺の奥に何かが染み込み、乳肉全体が燃えるように熱を発した。そして、ヌメヌメとスライムが乳房を僅かに這い回るだけで、
「ヒ、ヒイ――っ！　オッパイっ、弾けるぅうう っ！」
ビクッと背筋を反らせて、唇の端から涎が漏れてしまった。
見る見るうちに乳首が突起していく。完全に発情した形状にぷっくりと膨らみ、感度が上がっていく。
「あ……ぁ、あっ……はぅうう」
プシャ、プシャぁ……、スーツの股間の内側でお漏らしして、生暖かい物が太股にまで流れていった。
「アハハ……、牝ノ反……応……ダ」
激しい呼吸を整えながら、肉体に何かをされたの

だと思った。
表情すらないのに、嬲るような言葉とプルプルと震える動きが興奮するような反応に思え、スライムらをキッと睨みつけるのだが、
「イっ！　やめっ……、オッパイっ、絞っちゃ……、き、きつい……キツイのが――っ！」
もう半分以上露出した乳房の一つに、縄のように細く形状を変えたスライムが、柔らかな肉果実の裾野に巻きつき、ぎゅるぎゅると引き絞ってくる。
圧痛――柔肌がパンパンに張り、赤みが差してくるのに、その刺激に恍惚とした表情を見せてしまう。
更にそこから振動を加えられると、
「ちょっ……、やぁあっ、お……おっ、おおっ、これ、き、気持ち……」
確かな快感が電流のように全身に駆け巡り、ついに肉芽が包皮を剥いて勃起を始める。
――なにこれ……、こんな気持ちいいのっ、知らない。く、癖になるぅうう！
危機的状況にあるのに、肉体が勝手に感じてしまう。あのチクッとした痛みの後から、鋭敏に、それも性感だけが異常に増大している気がする。
気色悪さから反転した感覚に戸惑いながら、逃れる術も持たず、弄ばれる彼らにされるままが、被虐感を生んでくる。
「はうっ、ま、また……」
スーツの生地が溶かされた素肌の部分に再びチクッと痛みが走り、それが全身に至ってくると、ドロドロとしたスライムの分泌液が染み込んでくるようで、そこが熱くなった。
すると、逆上せ上がったように頭がポーとしだして、身体から力が抜けていってしまう。
――こいつらは、元、研究者……。た、多分、何かの薬……。ま、まずいわ。
ここから脱出する為にスライムらの助けが必要なのは分かる。その為、全身をこいつらに覆われるのは仕方のないことであるが、身体を好き勝手にされるのは、我慢ならない。それなのに、
「はあ……、そ、そんなところまで……」
鼠蹊部の黒生地まで溶かされだし、お漏らししたばかりの股座が露出してしまう。
ただの物質ではない知性を持った、人間の価値観を有した彼らの前で、女の一番恥ずかしい部分を見られる。その羞恥に、咄嗟に両手で隠そうとするのだが、
「余……計ナ動キ……ヲシタ……ラ、守ッテヤ……ラナ……イゾ」
「大人シ……クジット……シテイロ、死……ニタクナ……イダロ」
悔しいが彼らに任せるしかないのだ。
――いやぁ……、見られちゃう。私の……おしっこに濡れた、ォ、オマンコ……。
虫食い状の穴が広がり、下着まで一気に溶かされた股間部が、完全に晒されてしまう。
下腹部に張りついていた何体ものスライムが体の一部をわざとらしく鼻やカタツムリの眼の形状に変えて、剥き出しになった肉裂を覗き込んできた。
「そ、そんな風に……見ないで。いやっ、嗅がないで、ハァ、ハァ……」
自らの小水や、スライムの分泌液でぬちゃぬちゃと濡れた女陰。恥毛が張りつき、光沢した桜色の肉の花弁は、興奮を示すように膨れ、蒸れた濃厚な牝の匂いを放っている。
チクリっ――感覚の最も過敏な突起、クリトリスに一瞬、またあの痛みが走った。
「うひっ！　あ……はぁっ、クリっ……ダメぇっ、おっ、おおっ」
真珠色の肉芽本体が、ヒリヒリとした痛みを感じながら、肥大していく。赤みを増して腫れあがり、射精する男根のように、ピクンピクンと脈動した。
「ヒ――っ！　は、破裂するぅうう。私のクリっ、おかしくなるぅっ！」
スライムどもの粘液に隠れながら、全身から汗を噴き出させ、盛りついた牝のフェロモンを大量に放出させている。淫蜜が溢れ、更にワレメをぐちゃぐちゃに濡らしながら、仰け反り喘ぐ。
その頃になると、周りの粘膜壁は全身に迫り、ほとんど身動きが取れなくなった。下げそこねた腕は顔の横に上げられたままで、身を捩るだけで、胸の肉果実は壁にへしゃげられる。スライムどもだけでなく、生体兵器の胃袋にまで、全身を舐められているように感じてしまう。
「ふァ……ハァ、ハァ、熱い……、あっ、あんっ」
もう自分の力で立っているのかも分からなくなって、全てを運命とスライムたちに預けるしかなくなってしまった。
下腹部に纏わりついたスライムの瞳の形状に変わったものが、見開かれる。
肉ビラが左右に開かれてしまい、彼は牝粘膜の奥を覗き込んできた。
「オオ、緩ン……デキタ……ゾ」
だらだらと淫蜜を吐き出し続ける肉壺が、ヒクつきながら広がってしまう。
――ハァ、身体中の孔っ、全部……開いちゃう。
膣も、アナルも緩んで、口元もだらしなく開き、牝汁も腸液、涎も漏らしていた。尿口は痙攣して閉じず、全身の毛穴すら、拡張してしまったように感じる。
「コ……ノ時ヲ待ッ……テイタ……ンダ」
ずにゅっ！　ぐぷっ、ずぷずぷ……っ！　股間に吸着していたスライムの一体が、口を開けだした膣孔を更に押し広げ、流動して潜り込んできた。
「なっ!?　ヒイ――っ、オマンコっ、入っちゃ……、

お、ほォおおっ」
雪崩れ込んでくる感触に、膣内の無数の襞が震わされ、ゾクゾクする快感が湧いてしまう。硬い肉棒などとは違ったその異質の刺激に、ビクンと背筋が伸びて、悦楽の震えを見せていた。
「だ、ダメ……っ、そんな……奥までぇっ！」
膣を満たしながら、スライムは子宮口を独特の滑りで通過し、こじ開けられながら、更に最奥まで侵入されてしまう。
女の中心まで占有されて、ピチャっと淫蜜の飛沫をあげた。牝部が満たされる感覚に、悦びを覚えてしまい、腰を回転させるようにくねらせていた。
――なにこれ？　す、凄い……。子宮の中が、入り込んだやつに、揺さぶられてぇっ、あ、ああ……。
スライムたちの淫毒にやられた肉体が、内側からの圧力を強い性感と認識してしまう。
「オ……イ、アイツダ……ケ、逃ゲ……ルツモ……リダゾ」
「ソウ……カ、女……ノ中ニ入……ッテ、一緒……ニ排出サレ……レバ……」
半固体であるスライムは、溶けたものと判断されてそのまま胃袋に残され、外には排出されなかった。その為、彼らはここに取り残されたまま死ぬこともできずに、ただ這いずりまわることしかできなかったのだ。
そこに落ちてきた一人の女。退屈な地獄の中にやってきた彼女に性的な悪戯を仕掛け、その反応を愉しむのも面白くて仕方なかったのだが、一体が気づいてしまった。
他のスライムらが女の身体を守っているうちに、自分だけはちゃっかりその中に入り込んでいれば、一緒に外に出ることができるのではないか。
「俺……モ……、俺ダ……ッテ」
永遠にこんな場所に閉じ込められるのはごめんだ。それはスライムと化した所員たち全てが考えていたこと。ステラの足下にいた連中や、胸元にいた者らも、彼女の下腹部へと移動し始める。
「そんな……動きまわられたら……ハァ……」
彼らの目的も知らず、全身を一斉に愛撫されているような感覚に、甘ったるい吐息を漏らすステラ。だが、既に一体のスライムが詰まった膣に、
ぢゅぶっ、ぬずぬずっ……。我先にと、次々と他のスライムらも入り込もうとしてくる。
「ひぎっ！　ちょ、ちょっと、そんなに……無理ィっ！　オマンコっ、壊れるぅっ」
二体目、三体目と、潜り込まれるたびに、どんどんとお腹が膨れ上がってきた。拡張される膣壁が悲鳴をあげて、大きく開いた唇から濡れた舌を伸ばして、唾を飛ばす。
強烈な圧痛に身を暴れさせるのだが、身動きがとれず逃げ出すことなんてできなかった。その間にも、ここから脱出したい一心のスライムらが、次々と肉壺を広げてくる。
「も、もう入らないィ……、やめれ……ぇ」
子宮がスライムで満杯になって、あっという間に臨月の妊婦のような形状に膨張する。女の器官に対する苦辱の責め。なのに、
――し、信じられない。私……これ、き、気持ちいいよぉ……。
確かな痛みがあるのに、膣や子宮を虐められていると感じると、どうしようもなく興奮してしまうのだ。そして命の危機にある状況では、この苦痛と快感がまだ生きているのだと実感させてくれる。それは悦びに変わった。
プシャ――っ！　失禁し、全身の脂汗が、快感による物へと変化していく。
「オマン……コ、入ラナイ……、アア、コッ……チガアッタ」
膣と子宮が限界と判断した一体が目指したのは、後ろの孔だった。
「ひゃはっ、そっちぃ⁉　お尻はっ、ダメぇっ！」
言葉と裏腹に、そこもすっかり緩んでいて、誘惑するように開閉を見せるアナル孔へと、スライムが潜り込んでくる。
「んっきゅう――っ、き、きたぁんっ、お、おおっ」
排泄器官への逆流は、膣以上に拒絶を見せるが、滑りと勢いに任せて、直腸の奥まで一気に侵入されてしまう。
すると、まだ外にいるスライムらも同調して、尻を這いずりながら、後ろに移動して、またもや次々と入り込まれてしまうのだ。
「ヒイっ、そんらに、入んないっ……。こ、これ以上……死んじゃうぅ……」
腸内が限界まで拡張されて、後から押し込まれた先のスライムが小腸から更にもっと奥まで移動していく。
猛烈な異物感に、涙を流し、瞳は上向いて白目を剥きそうになった。体内で無数に蠢かれるたびに、ピクッと肉体が痙攣するのだが、責め苦の中に新しい快楽の世界が見えてしまう。
「っあ……あ、あ……もう、いっぱいれすぅ……」
スライムらも流石に窮屈に感じたのか、もっとステラの孔を広げようと、チクチクと内側から刺してきた。あの淫毒が膣とアナルから染み込んで、女賞金稼ぎの口元から、だらだらと涎が漏れていった。
「ふァ……、き、気持ち……イイっ……」
おしっこを垂れ流し、淫蜜は止めどなく、理性の欠片も無くしたような表情を晒してしまう。それなのに貪欲にまだ刺激を求めて、身悶え、粘膜壁に肢体を擦りつけた。全身を舐めつくされているような感覚に、ゆっさゆっさと乳房を揺らして、膨れきった発情乳首に快感を送り込む。

姫騎士会長アイラ
背徳の接待快楽
第一話 学園存続の危機 恥辱のロストヴァージン
小説/NOVEL 新居佑(あらいゆう) 挿絵/ILLUSTRATION コザ
学園の経営を救う方法。それは彼氏に隠れ、
淫売生徒会長として身体を使うこと――。

東京副都心沿線に、広大な敷地を持つ聖アザリア学園の昼休みは、おだやかな日差しの中、いつもと変わらぬ、生徒たちの和やかな談笑に包まれていた。

しかしそんな雰囲気が、一人の男の怒鳴り声によって打ち壊される。

「てめぇっ、今なんて言いやがったっっ!?　この俺が親の七光りなだけの、無能魔法騎士だってっ!?」

「そ、そんなことは一言もっっ！　ただ礼儀をわきまえるのが騎士の基本なのですから、もっと……」

丁寧に手入れされた、美しい緑の芝生が生えそろう校庭の中央で、数人の男が三、四人の女子を取り囲み、グループのリーダー格の男が大きな声で恫喝している。

「あれ、野党幹事長の一人息子・小寺洋介だろ。親子そろって傲慢で女癖が悪いって噂の……。A級魔法騎士に受かったって話、本当だったんだな」

「バカっ。受かったっていっても、やってることはヤクザまがいで、裏組織とズブズブなのは有名でしょ。今日も稽古を口実に、ウチの女子にちょっかい出して、断られたあげく、逆ギレしてるらしいわ」

男の身長は百八十センチほどで、がっしりとした身体に、色濃く日焼けした肌。腰には魔法騎士の証である西洋剣を帯びており、服装は自慢の肉体を見せつけるように、胸の大きく開いたラフなファッションを着こなしている。

周りにいる生徒たちは、同年代の悪漢になすすべもなく、ただ遠巻きに見つめることしかできない。

なにせ父親が、この国の政治の有力者だ。しかも裏組織と深い繋がりがあり、あらゆる悪事に手を染めながら、徹底した情報隠ぺいによって、現役職に上り詰めたという噂がまことしやかに出回っている。

世界大戦末期、『魔法』と呼ばれる新たな力を、人々が手に入れてから七十年余。魔法犯罪を防ぎ、国民のために正義を成す人材を育成する『聖アザリア学園』魔法騎士科。

その敷地内での狼藉であっても、権力者の息子である男を罰することは、一介の学生たちにできることではない。

「ふん、その生意気な態度を一から教育しなおしてやる。おい、例の魔弾を使っていいぞ、話は親父につけさせる。こいつら全員失神させて車に放り込め。俺の気が済んだら、お前たちにも分けてやろう、くくく」

男の命令に、黒いスーツにサングラスの出で立ちをした、取り巻きの男たち数人が懐から拳銃を取り出し、少女たちに照準を合わせ、問答無用で発砲してきた。

しかし放たれたのは通常の銃弾ではない。形状は同じ鋭利な円錐型ながら、少女たちの胸に着弾した弾丸は、その衝撃であっけなく砕け散り、瞬間、掌サイズの紫色の魔法陣を出現させる。そしてそこから発する妖しい光を受けた少女たちの瞳が、まるで意思を奪われるかのように、その輝きを失っていく。

「魔法犯罪者から押収した非合法の魔弾は、相変わらずすげぇ効き目だぜ。魔法に耐性がある魔法騎士科の連中でも一発だ。さて、今晩はこいつらで溜まった性欲を……なにっっ!?」

「ぐあっっ！」「ぐぇっっ！」「あがぁぁっっ!!」

男が下卑た笑みを浮かべた瞬間、取り巻きの男たちが、情けない声を上げながら、芝生の上に力なく倒れ込んだ。

男たちの胸元は、鋭い刃によってスーツを切り裂かれ、そこに『昏倒』を意味する魔法陣が刻みつけられている。

「くっ、いったいどこのどいつだっ!?　この俺様に盾突くバカはぁっ！」

「――バカはあなたたちよ。ここは神聖な学園の敷地内。非合法魔弾で女生徒を拉致しようとするなんて、あなたは魔法騎士失格だわ！」

健やかな陽気に相応しいその凛とした声が、サァッッと流れる風にのって、周囲に希望と安寧を届ける。

女生徒たちの危機に、天使のごとく颯爽と現れたブロンドの少女は、握った細身のレイピアをスッと構え、迷いのない蒼い瞳を、苛立つ屈強な男へと向けた。

「あ、あれは……っ！」

「やっぱり来てくれたんですね、蘇芳生徒会長っっ」

それまで恐怖に支配されていた生徒たちが、一人の少女の登場に喜び沸き立つ。

彼、彼女たちが待ちわび、そして心の底から尊敬する、学園の生徒会長にして、日本で数人しかいないS級魔法騎士資格を、学生でありながら保持している――蘇芳アイラ。

身長は百六十センチを上回る長身で、学園指定の制服の上からでも圧倒的な膨らみを見せる九十センチのバスト。それでいながらウエストがキュッと引き締まり、プリーツスカートに隠れたうら若い桃尻は、バストと同じくらいの超ボリュームを誇っている。

彼女自身の国籍は日本だが、欧州出身の母から色濃く受け継いだ、きめ細やかな白い肌に、陽射しに輝くブロンド。宝石のように透き通った凛々しい碧眼は、見るものを引きつけてやまない魅力的な美貌を形作っている。

「ははっ、お前が蘇芳アイラか。なるほど、元SPであるこいつらを瞬殺とは。十年に一人の逸材『幻惑のワルキューレ』……噂は誇張じゃなかったわけだ」

「私のことは関係ないでしょ。小寺洋介、S級魔法騎士として、学園の生徒会長として、あなたの狼藉は許せない。非合法魔弾の使用は重罪よ。大人しく

拘束されなさい」
凛としたその声音には、誰よりも強い正義感と、聖アザリア学園生徒会長としての、揺るぎない矜持と使命を深く感じ取ることができる。
「くく、バカが。そう言われて、大人しくするやつがいるかよっ。S級だかなんだか知らねェがなぁ、しょせんは粋がる小娘だろうがっ！」
男が鞘から抜き放ったロングソード。その刀身に刻まれた魔法陣から妖しげな闇が吹き出し、刃全体にまとわりついていく。
男が握った剣先が瞬く間に黒一色に変わると同時、刃そのものが二倍三倍に巨大化し、不気味に吊り上った瞳と大きく裂けた口が現れる。
「刀剣の魔物化……。闇魔法の一種ね。とても正規の魔法騎士とは思えない技だわ」
魔法騎士は凶悪な魔法犯罪抑止の都合上、一般人が禁じられている強力な魔法の習得・使用を許可されている。
しかしそれはあくまで犯罪者を捕えるためのものであって、裏組織が使用する、非合法な魔法陣を圧縮した弾丸……魔弾のように、他者の肉体や尊厳そのものを踏みにじるものは使用しないことが、正義を守る魔法騎士の訓戒の一つだ。
「こいつの能力は相手の魔力を食うことだ。くく、ただの牝豚になった天才魔法騎士・蘇芳アイラを裸で跪かせて、公衆の面前で謝罪させてやるっ！」
上段に振りかぶった魔剣を、男がアイラに向かって力任せに振り下ろす。ゴォッッ！　と、暴風にも似た衝撃が少女騎士の見目麗しい美貌へと迫る。
「――悪いけど、この学園でそんなことはさせないわ。はぁああっっっ!!」
吐き出された裂帛の気合いとともに、アイラの握ったレイピアが、目にもとまらぬ速さで男の魔剣を下から鋭く突き上げる。
ギンッ！　という鋭い金属音をたてながら、男の気づかぬ間に、黒い刀身に一つの魔法陣が刻まれていく。その効力は――。
「うっっっ、ぐぁああっっっ!!」
刹那、男の苦痛に満ちた絶叫が美しい学園の中庭に響き渡る。男に痛みを与えているのは、彼自身が握った魔剣そのものだ。
アイラによる魔法陣が発動した瞬間、男が握っていた魔剣がくるりと刃の向きを変え、男の胸元にその大きく裂けた口で食らいつき、先ほど彼が言った通り、魔力を食い漁っている。
「『誘惑』……。残念だけど、もうその魔法はあなたの制御下にはないわ。正義と市民の安全を守るのが魔法騎士の役目。その力を使って、自ら悪事を働くなんて」
「こ、のメスブタぁぁっっ！　ぐぅううっっっ！」
『幻惑のワルキューレ』。その二つ名の通り相手の魔法そのものを惑わし、周りに危害を広げることなく悪党を制するのが、アイラの最も得意とする戦い方だ。
己の魔力を吸い取られた男が、取り巻きたちと同じように、意識を失って地面に倒れ伏す。
アイラはそれを見とめると、握ったレイピアを鞘に納め、気絶した生徒たちの頭上の空間に癒しの魔法陣を指で描き、少女たちを気絶から回復させる。
「これでよし。……怪我はないようね。ふふ、みんなもう大丈夫よ」
そうにこやかに微笑むアイラに、生徒たちから鳴り止まない拍手喝さいが送られる。
「さすが蘇芳会長っ。いつ見てもほれぼれしますっ！」
「おまけにお母様はイリア公国の王家の血筋なんて……。家柄も、ルックスも、実力も……おまけに性格も高潔でお優しくて、まさに理想の姫騎士様っ。アイラ先輩は、私たち聖アザリア学園の誇りだわ」
「ちょ、ちょっとみんな。それは褒めすぎよ、もうっ。ほらもうすぐ午後の授業が始まるわ。しっかり勉強して、立派な魔法騎士を目指しましょう」
口々にアイラを褒め称える生徒たちの声に、アイラは年頃の少女らしく、頬を少し赤く染めながら、気恥ずかしそうな表情を浮かべる。
しかしすぐに生徒会長としての、凛とした顔を取り戻すと、生徒たちを優しく鼓舞し、魔法騎士になるという夢を叶える学び舎へと送り出していった。
――放課後。小寺洋介を所轄の魔法騎士に引き渡したアイラが今いるのは、会議などで使われる生徒会室とは別に用意された、生徒会長の専用室だ。
そこは爽やかな温室になっており、きちんと管理された室温や湿度が保たれた、教室ほどの広さの部屋の中には、七十年間、アイラを含む歴代の生徒会長が世話をし、育ててきた数多くの草花が芳しい香りと、見目麗しい花びらを満開に咲かせている。
そんな優美な部屋でアイラは一人、備えられたクラシックな椅子に座り、『彼』が来るのを静かに待っていた。
「ご、ごめんなさい。生徒会長っ。魔法実技の授業で居残りをさせられてしまって……」
生徒会長だけが鍵をもつ部屋の扉を開け、息を切らして入ってきたのは、学園の一年生を示す淡いブルーのネクタイをした、一人の小柄な少年だった。
「謝ることはないわ、巧。私もちょうど今来たところよ。さぁ、紅茶でも飲んで、落ち着いて」
頭を下げて謝る下級生の少年に怒ることもせず、アイラはその白く美しい右手で手招きをして、巧と呼んだ少年を自分と真向いの位置に座らせる。
「あ、ありがとうございますっ。生徒会長の紅茶、今日もとってもおいしいです……あ、熱っ！」

著者近況　今まで執筆してきた、敗北→陵辱モノとは違う、ヒロインが悪党にエロ奉仕させられる作品なので、シチュが色々と初体験で楽しみです。ドラえもんもいいですが、ベイマックスも隣に置きたい新居佑でした。

そう言った巧は、緊張しているのか、椅子に座ってアイラと向かい合い、妙にそわそわしながら、熱い紅茶を一気に口に含む。と、案の定火傷して、口に含んだ紅茶を、自分の衣服に噴出してしまう。

「だ、大丈夫っ!? 馬鹿ねぇ、そんなに急いで飲むから……」

口ではそう言いながら、アイラはすぐに冷たい水を用意し、巧へと手渡す。巧の制服に散った紅茶の滴を、自身の白いハンカチで優しく拭き取っていく。

「あ、ありが……ごめんなさい蘇芳会長。僕、その……まだ会長と二人きりなの慣れなくて……」

「アイラ」

「え……?」

謝る少年の顔を、アイラはその澄んだ蒼い瞳でじっと見つめて、そう言った。その声は、いつもの凛とした生徒会長のものではなく、年相応に可愛らしく、年上が年下をからかうような意地悪っぽさを感じさせるものだ。

「アイラよ。この前約束したでしょう? 二人きりのときは生徒会長じゃなく、下の名前で呼び合うって。もう、忘れたの巧?」

「あ……、えと……は、はい。生徒会ちょ……いえ、ア……アイラ、さんっ」

『さん』も禁止。私たちその……カレシとカノジョの関係なんだから……巧のことは巧って呼びたいし、私のことはアイラって、そう呼んでほしいのよ」

さっきまで恥ずかしがる巧を諭していたアイラが、自らの頬をほのかに赤く染めて、巧以上に恥ずかしそうに、無意識な上目遣いで、自らの想いを年下の彼氏に伝える。

(わ、私ったら……。別にさん付けくらいいいじゃないっ。巧だって、女子と初めてお付き合いするんだから、恥ずかしくて当たり前。ああ、でも……っ)

二学年下の魔法騎士見習いである春日(かすが)巧と付き合い始めたのは、つい一週間前のことだ。

日本における魔法騎士育成の第一人者であり、ここ聖アザリア学園の創設者を曾祖父に持ち、今は亡き両親も世界に名を知られた立派な魔法騎士であったアイラ。

卒業後、現場の魔法騎士として数年の経験を積んだあとは、現在、父方の叔母に任せている学園理事長の職を受け継ぎ、立派に社会へ貢献する魔法騎士を大勢育成するのがアイラの夢だ。

幼い頃からはっきりとした未来のビジョンがあったためか、アイラにとって恋愛というものは、自分にはまるで関係のないものだと思っていた。

(ふ、不思議だわ。巧と初めて視線を交わした瞬間、胸の奥でなにかが弾けたみたいに、今でも鼓動が高鳴って、私……。これが恋というものだったなんて)

一ヵ月前、新入生も学園の雰囲気に馴染んできた頃、アイラは学園の厩舎を見回っていると、そこでひとり馬の世話をしている新入生に出会った。

それが巧だ。

馬への丁寧な世話の仕方と、なにものにも分け隔てのない純粋そのものと思えた彼の瞳の美しさに、気がつけば毎日二人で語らうようになっていた。

厳しい魔法実技の授業についていくのがやっとという巧に、密かに稽古をつけてやったり、アイラ自身の愛馬の世話を任せたりもした。

そうやって少しずつ二人だけの思い出と秘密が増えていき、ついに先週、普段奥手で気の弱い巧が告白をしたのだ。

そしてアイラもまた、その気持ちに初めての男女の口づけという形で応えた。

人生で初めての……異性として好きという感情を抱いた相手だからこそ……。

(下の名前で呼んでほしい。敬称もなにもなく、一人の私として接してほしいの……っ)

古くは王家に繋がる名門の出であり、自身も日本中から注目される若手のホープだけに、気を張らないありのままの蘇芳アイラを、巧だけにはさらけ出したい。打算ではない本当の恋人同士でありたいから、たとえそれが巧の優しさであっても、壁をつくってほしくはなかった。

そんなアイラの想いを感じ取ったのか、巧も恥ずかしそうに伏せていた顔を上げ、凛とした生徒会長ではない、恋をするうら若き少女の表情を見せるアイラに、小さい声ながらも告げる。

「わ、わかりまし……わかった。アイラさ……ううん、アイラ。紅茶おいしかったよ。ありがとう」

「〜〜〜〜っ。ど、どういたしまして。た、巧。ふふ、うれしいわ、こちらこそ、ありがとう」

自分で呼ぶように言っておきながら、いざ面と向かって言われると、身体から湯気が出るんじゃないかと思うくらい、全身が熱くなってしまう。

(ああ、でもうれしいわ。まったく、巧って、いざというときは勇気を出すのよね、告白のときも……)

学科は十分だが、実技が苦手で、身体も小柄。しかも童顔の巧は、アイラが見ても気弱なイメージが先行してしまう。

しかし決めるべきポイントでは、しっかりと覚悟を決め、真摯に想いを伝える姿に、アイラの心がキュンっと、甘い高鳴りをはっきり覚える。

自分はともかく、余計な波風の影響を巧に与えたくないので、大っぴらにデートなどはせず、アイラだけのプライベートルームである、この生徒会長室だけの逢瀬だが、その姿は、街行く恋人たちにも勝るとも劣らぬ素敵な雰囲気なのだろうと、アイラ自身感じている。

「あ、巧……さっきの紅茶、ズボンのほうにもこぼれてしまったでしょ? 染みになるといけないわ。そっちも拭き取ってあげる」

著者近刊 『キュアリープリンセス 正義の心を悪堕ち洗脳』『気高き妖狐は悦獄に堕つ』『エンゼルヴィーナス 失墜の天使』『守護姫 淫神復活の宴』『ダブル姫騎士 隷辱の王室』『サムライスレイブ 姫武者淫辱』 好評発売中!

巧が自分の名前を呼んでくれたことに、気分が高揚してしまって、つい年上なところを見せてしまいたくなる。

アイラは席を立ち、巧の目の前でグッと腰を下ろすと、先ほどの白いハンカチを、巧のズボンに飛び散った紅茶の滴へと当て、丁寧に水滴を拭き取っていく。しかし――。

「う、あっ……ア、アイラ……っ。その格好は……」

「え、どうしたの？　……きゃあっ！」

静かな会長室にアイラの、これまでの落ち着いた声ではない、可愛らしい悲鳴が響く。

無警戒にしゃがんだせいで、アイラの短いチェックスカートから、魅惑的な太腿だけでなく、可愛らしい純白のショーツが、巧に丸見えとなってしまっていた。

「も……もうっ、巧はエッチなんだから……っ。～～～～っ」

頬を赤く染め、いじらしく頬をぷくぅと膨らませるアイラは、姿勢を微調整し、巧がスカートの中などを覗けないようにしてしまう。

（バ、バカッ。今のは私の不注意のせいなのに、巧が悪いみたいに言って……。これじゃ巧のほうが恥ずかしくなっちゃうじゃないっ）

自分の女の部分を意識させられ、アイラはどうすればいいかわからず、巧の股間だけに視線を集中させて、自分の顔が真っ赤になっていることを悟られないようにする。

年上でありながら、恋愛の仕方も、性との向き合い方もよくわからない。そんな自分を好きになってくれた巧に、きちんと応えたいが、恥ずかしくて頭が真っ白になる。

「……あっ⁉」

うっすらとした涙まで浮かべていたアイラの視界に入った景色に、思わず小さく声を上げてしまう。

（これって、まさか……っ）

制服のズボンの股間部分。華奢な巧の体躯を現すかのように、普段スラッとしているはずのその部分は、文字通り下からなにかに押し上げられて、大きくムクリと盛り上がっている。

「ご、これはっ⁉　ごめんなさ……ごめんっっ、アイラっ！　ぼ、僕……っ」

アイラが一瞬惚けていると、巧がまずいものを見られたとばかりに急いでバッと両手で股間の膨らみを押さえ隠す。

その顔は耳まで真っ赤になっており、いつもはつぶらな瞳はフルフルと震え、まずいことを親に見られた子どものようにも見える。

（巧のこの反応……。じゃあやっぱりこれ……）

恋い焦がれる気持ちに夢中で気づかなかったが、巧も立派な男性で、年頃の男子は、本人の意志に関係なく発情してしまうものだ。

思いやりのある巧のことだ。大好きな相手に、自身の性欲の昂りを知られるなんて、恥ずかしいと同時に、アイラに不快な思いをさせてしまったと感じているのだろう。

（巧……。そんなことはないわ。だって私はあなたのことが……）

思いもよらない突然の出来事に、一瞬困惑してしまったが、アイラはすぐに気を持ちなおすと、未だ膨れたままの股間に手をおいて、かすかに震える後輩に、そっと微笑んで言い聞かせた。

「……ううん、いいのよ巧。私のほうこそごめんなさい。男子がこんなに敏感だなんて知らなかったから……。私は、その……うれしいわ。巧のこと……好き、だから」

頬を恥ずかしさで赤らませながら、アイラは素直な想いを口にした。自身が発したその言葉にアイラも、そして巧も、胸につかえていた緊張が徐々にほぐれていく。

「男の子ですもの。その……出したい、のよね？」

「ア、アイラ……。ごめん、僕もアイラのこと好きだから、我慢しなくちゃって思ってたんだけど……でもっ」

「ふふ、我慢してたんだ？　ありがとっ。私のことを気遣ってくれたのね」

言って、アイラは股間を隠していた巧の手を、愛おしそうにそっとどけて、きれいな指を優しく使い、少年のベルトを外していく。続いてチャック……そしてズボンそのもの、その下のトランクスまでも一気にずり落としてしまう。

「あ……ああっ……アイラっ」

「す、すごいわ。これが巧のオ、オチンチン……」

（男の人の、初めて見るけど……お、大きい……。それにこんなにビクビクしてっ）

優秀な魔法騎士であると同時に、高潔な令嬢として育ってきたアイラが初めて目にした勃起状態の男根は、圧倒的な存在感を放ち、そこに存在していた。

「アイラ……。もしその……嫌なら別に……」

「……巧、恥ずかしがらないで。わ、私にどうすればいいのか教えてちょうだい。私、こういう経験も知識もないから……お願い、恋人のあなたを気持ちよくしてあげたいのっ」

巧が一度ごくりと息を呑んで告げた。

「アイラ……。じゃ、じゃあその……。む、胸でチンポをその……扱いてくれないかな？」

「む、胸……？　私のおっぱいでいいの？」

正直、膣に挿入する以外に、指や手で擦るくらいしか考えつかなかったアイラにとって、自らの胸で気持ちよくしてほしいという巧の要望に、わずかな驚きと戸惑いが浮かんだ。

「ほ、本当に胸でいいの⁉　男の人ってその……こういうときは女性とセ、セック……」

深淵戦隊クトゥルンジャー

～厭らしき巨大ダコは陰核脚を食む～

狙ってました陰核脚責め！

漫画 COMIC：からすま弐式

頭足類の頭部に翼を生やした人間のような四肢…

それがクトゥルプスの姿の一つだって書かれてる

こんな感じかな！

あはは

ぽいぽい！

ミコトとハカセで頭足類ウォッチ！

ハスタードはクトゥルプスと同じ旧き支配者の一人だけどずっと対立してて…

ハスタード…あのイカ軍団ね…

地球を我が物にしようとサンジュエルを探しているんだ

クトゥルンジャーの目的は奴らが持っている六つ目のジュエルを取り返して…

サンジュエルを六つ揃えると地球の旧き支配者は覚醒めることができるとか

再びハスタードを封印するってことなんだ！

そ…壮大ね……

でも…あのスーツには驚いちゃったなぁ…

リオオオン

クトゥルプスの使い魔ショゴゴを召喚して身に纏うショゴスーツは…選ばれし者しか装着できない…

すごいのなんだよ！

そ…そうなんだ…すっごい恥ずかしい装備なんだけど…

ドーン

…ミコトに見られて恥ずかしい人なんているの？

いっつも研究室いてさカレシの影いっこもないけど

ニャニャ

はえ!?

かっ…彼……

ハ…ハカセには関係ないでしょっ!?

子どもが生意気なコト聞くんじゃないのっ！

チャプ

……っ！

むっ

……

そっ…そんな言い方ないじゃんっ!!

ドシン

好きな人もできたことないなんて

男のコに言えるワケ…ないじゃない…

スーウ…
ポチャン
ジュワアアア
スーウ…
もう…っ
何でみんなちゃんと
整頓しとかないのよっ
見つかる物も
見つかんない
じゃない…！
ガキャ
ガキャ
水方大学
頭足類研究室
ブブボボ
ブボボ
!?
ガクッ
アシ
アシ
何なの!?
今の音っ
ダダ
なッ…!?
ぬめっ
ぬめ
巨大な…
タコ…!?
誰かぁ
ガチャ
イイ

テケリ・リチェンジ!!
キュレウェッ☆
ツール・オブ・クトゥルプス!!
ギュイッ!!
ウィップモード！
やあっ!!
ああっ クトゥルンジャーだ!!
助けてくれぇっ!!
ンゴオッ!?
邪魔…スルナァアア!!

はぁっ!!
きゃあッ!?
オデ サッキ突然 声聞コエタ……
研究室ノ人間ニ捕マリ 切リ刻マレ砕カレ オモチャニサレテイッタ 仲間タチノ声…
すぐに再生した…っ!? こんな怪物どこからっ…
サァ教エロ 人間ノメスノ 弱点ハドコダ…?
あ…あれは 神経学の先生!
フム…陰核…ハ… 頂部・体部・脚部 カラナリ…?
神経ガ集中シテオリ… 人体デモ特ニ敏感デ… アル…… カァァ…
そんな…腕から 知識を吸収してる なんて…!?
オデタチガ 何モ考エテイナイト 決メツケテ……!
次ハ オ前タチガ 苦シム番ダ!!
ナルホド…ジャァ ソノ陰核トヤラカラ 実験シテヤル…
なっ… 来ないでっ!!
んがっ

ひゃ…ッ
やめっ…！
んぅう…っっ
どっこ…
触って……
前…解剖学の
本で見た…
陰核(クリトリス)と普通
呼ばれているのは
そのごく一部で…
身体の中に大部分は
埋まっているとか…
そこから
刺激するつもり…!?
陰核膨ランデ
キタァ…
脈打ッテルノガ
分カルヨウニ
ナッテキタゾォォ
そんなとこ
押されたって…
何ともないわよ…っ！
んく…
…っぃ…！
これ…やっぱり中
扱いてきてる…っ！

お肉の薄いところから…吸盤…コリコリして…え
ぐ…っンんう…！
無駄な事はやめて…おとなしくしなさ…っ！
あっ…んぐ…!!
ゴドゥんっ
確カニココガ弱点ノヨウダナァァ…♪
でもこれなら…まだ大丈夫っ耐えられる……！
クリの先っぽ…さえ触られなければっ
こんなの…んひう…ッ
反撃の機会は絶対に…！
…っぐ…ぅ！
んあはあっっ!!
キュルッッ

女狩人（ハンター）スフィ
死と悦楽の甘い罠
Suffi: the hunter girl
小説 NOVEL／酒井仁（さかいひとし）
挿絵 ILLUSTRATION／ごや
名うての女ハンターが挑む危険なクエスト
未開の地に蠢くモンスターに嚥下され!?

1

どろりとよどんだ空気は、肌にまとわりつくようで不快だった。

むしむしと湿度の高い空気にじっとりと汗が滲む。見上げると、まるでもやがかかったようにくすんだ空の中天に薄黄色い太陽が微かに見えた。

（ここ……どこ……？）

空気だけでなく、意識もどろりと濁っていてはっきりしない。最初に思い出したのは、自分の名前。

（私は、スフィ……そう、スフィ・J・アークランド）

だが記憶の糸はそこで途切れ、スフィはもう一度周囲を見回した。

崩れかけた岩壁が目立つ町並み。

砂埃の舞う大地。そこここの壁には老人がもたれかかり、死人か亡者のようにふらふらとさ迷い歩いている人の群れ。

こんな寂れた街で、自分はなにをしていたのだろう……。と、珍しく割れていない窓があり、そこに自身が映っていた。

赤茶色の短髪、髪と同じ色の瞳。

肩や太腿が大きく露出した薄手の服は、彼女のむっちりと肉感的なスタイルを強調している。

足元は白のブーツ、両手にはオープンフィンガーグローブ。そして……

（これは、銃……？）

腰のホルスターに収まっているのは、レイブラスター。そう、熱線を撃ち出す強力な武器で、多くのハンターが使用している汎用タイプだ。

スフィの頭の中に、ブラスターの使用法がすらすらと思い出される。そう、これは自分の愛用品だったはず。

ただし実戦において彼女が得意としていたのは――。

「うぉおぉあああああああ！」

背後からの襲撃を、スフィは振り返りもせずにかわした。

がつん！　棍棒状の武器を地面に叩きつけた男は、勢い余ってつんのめる。さらに右からはナイフ、左からはマチェットを持った男たちが襲いかかる。

「ふっ、はぁあっ！」

くるりとスフィの身体が宙を舞い、その攻撃を見事にかわすと同時に、瞬時に反撃に転じる。

ばきいっ。

延髄蹴りを叩き込まれたナイフ男が、仲間を巻き添えにして倒れ込む。その胸板にマチェットの刃が吸い込まれる。

「ぎゃぁあああああ」

じゅううっ、と男の胸から白煙が噴き上がる。どうやらヒートマチェットだったようだ。

「くそっ、このアマ……！」

焼ける肉から得物を抜けず、うろたえるマチェット男の足元で、スフィは既に構えていた。

どすっ、と鈍い音が男の鳩尾（みぞおち）で弾け、崩れ落ちる。

「ひっ、ひぃいいいっ」

最初に襲ってきた男が棍棒を放り出し、へっぴり腰で逃げていくのを、スフィは追わなかった。

いや、襲撃者たちの顔に見覚えがあるような気がしたが、頭がずきずき痛んで追えなかったのだ。

「そう……そうだ、あたしは『ハンター』スフィ。そしてこいつらも」

ハンター。

それは主に「D-EARTH」と呼ばれる世界で活躍する者たち。宝探しから人狩りまで、どんな汚れ仕事でも報酬次第で引き受ける荒くれ者。

二十一世紀後半――全世界に「空間の亀裂（深）」とでも言うべきものが出現した。「DEEP-CRACK（ディープクラック）」と名付けられたその向こうには、「もう一つの地球」が存在した。

ただし、人類のよく知る地球とは異なる進化を遂げた未知の世界……そこには未知の動植物、未知の鉱物といった、人類が未だ知らぬ資源が存在した。

いわゆる「大冒険時代」の幕開けであった。

（そう、あたしはメルラック重工に雇われて、D-EARTHに来たんだ）

D-EARTHの陸地の大半は亜熱帯の密林。メルラック重工はその一角に地球上には存在しないレアメタルの鉱脈を発見した。

だがそこはおぞましいモンスターの生息地でもある。大企業は金にあかせてハンターを多数雇い、怪物の駆除に当たらせたのだ。

「でもなんでこんな街に？　途中までの記憶は残っているのに……」

怪物の生息地に近づいたところまでは覚えている。さっきの襲撃者たちはスフィ同様にメルラックに雇われたハンター。そして――D-EARTHには人類も、文明の痕跡もないはずなのだ。

（なら――ここはどこ？）

混乱する記憶でスフィは、自分が新たな敵に囲まれていることに気づかなかった。

「うおぉっ、押さえつけろォッ」

「なっ、しまっ……」

物陰から飛び出してくる複数の男たち。その顔面に膝を叩き込むものの、下半身にタックルを食らい、スフィは仰向けに倒される。

「うえひひひ、いいぞ、そこの小屋に連れ込むんだ！」

「クッ、この、放せ……ッ」

暴れるスフィの腹に強烈なパンチが叩き込まれ、女ハンターは身体を丸めて咳き込んだ。

「お転婆が過ぎると、そのきれいな顔がズタズタになるぜぇ……」

「ッ……！」

整った乙女の顔に鋭い刃物が当てられると、スフィは抵抗できない。男たちは粗末な小屋に少女を連れ込むと、衣服を剥ぎ取りにかかる。

「ひっひひひ、女だてらに相当腕の立つハンターらしいが、こうなるとただの女だな」

「このでかいパイオツに顔をうずめてみたかったんだ……」

乱暴に胸がはだけられ、男たちがむしゃぶりついてくる。乳首に男の歯が食い込み、スフィは眉をひそめる。
「やめろっ、あたしに触れるなッ」
男たちのぬめぬめした舌を感じ、嫌悪にうなじの毛が逆立つ。だが乙女の突起物は本人の意志とは無関係に、刺激に反応して硬くしこってしまう。
（くっ、こいつら……！）
「強がったって痛い目を見るだけだぜ、おとなしくしてりゃ、天国に連れてってやるぜ」
「あぁっ」
下着を剥ぎ取られ、さしもの女狩人（ハンター）も顔色を失う。平らな下腹部に萌える赤いアンダーヘアに、卑劣な男どもはケダモノのような目を向ける。
身をよじってその視線から逃れようとするものの、幾本もの腕が伸びてきては無理矢理に股を広げられる。
「くそおっ、見るなぁあっ」
「げひひひ、いい様だな、女ハンターさん。すぐによがらせてやる」
腕を、肩を、太腿を押さえつける腕。乳房に指が食い込み、尻が撫でまわされる。
そうやってスフィの自由を奪い、弄ぶ一方で、彼らの股間では凶悪な肉棒が隆々とそびえ立ち、待ちかねるようにしごかれていた。
「ひ、ひひひ、ぶ、ぶちこんでやる」
運のいい男がスフィの股の間に腰を割り込ませ、反りかえった陰茎の先を花弁に近づけてきた。
「ゲスども……その汚らしいものをあたしの中に入れてみろ、絶対にぶち殺してやる！」
だが、少女が虚勢を張れば張るほど、男の顔には邪悪な喜びが浮かぶ。腰を沈め、濡れてもいない乙女の肉穴に勃起ペニスをずぶりと突き立てた。
「……ッ……！」
ぎり、と唇を噛んだのは膣を強引にこじ開けられたからだ。金属のように硬直した男の肉が、みりみりとスフィの肉を強引に押し広げていく。
内腿に筋肉が浮かび上がるが、陵辱者の侵入を止められない。
「う、あぁあっ……！」
スフィとて名うてのハンター、処女というわけではない。しかしレイプされて濡れるほど経験豊富でもない。
「ぐひひひ、こりゃいい締まりだ。まさか処女じゃねえよな、お前？」
そう言ってぐいぐい腰を突き出してくる。肉穴をえぐられる間も、無数の腕に乳房や尻を揉みくちゃにされ、舌に頬や唇をべろべろと舐めまわされる。
（気持ち悪いッ、こいつら調子に乗って……！）
「おい、待ちきれねえぜ。ケツも使わせろよ！」
「なら俺は口だ！」
スフィは驚きと嫌悪に目を見開く。
その身体が幾本もの腕に持ち上げられ、膣を犯す男が仰向けになると、背後から伸びた腕がぐいと尻を広げた。
「な……貴様ら、やめ……ッ！」
ごりっと硬いものが少女のアヌスに押し当てられた。と思った次の瞬間、ずぶずぶと太い肉がスフィの尻穴に押し入ってきたのだ。
「いぎっ……！」
アナルセックスという言葉くらいは知っているが、そこを犯されるのは初めて。通常、排泄にしか使われない尻穴に陰茎をねじ込まれるのは、想像以上の衝撃だった。
（身体が引き裂かされる……っ）
だが、スフィが苦痛の声を上げれば上げるほど、男たちの興奮はむしろ増す。
膣と尻を同時に犯され、さしもの女ハンターの目尻にも涙が浮かぶ。
その哀れな頬を大きな手に掴まれ、目の前に赤黒くそびえ立った肉の凶器が迫ってきた。
「お願い、やめ……んむぶぅうっ」
「おほっ、舌が絡みついてきやがる。実はちんぽ好きじゃねえかこいつ？」
そんなわけあるかバカ、と言いたいが、口の中は男の肉でいっぱい、喉をふさがれ息ができない。その間も膣と肛門は無残にえぐられ、乳や太腿を揉まれまくる。
（こいつら……まるで……）
男たちは、まるで示し合せたかのような連動した動きで、女ハンターの肉体の隅々まで責め立て続ける。
為す術もなく弄ばれるスフィは、いつしか彼らを一つの巨大なモンスターのように感じていた。
無数の腕と無数の陰茎を持った、醜悪な怪物。それはスフィを辱め、欲望を吐き出すだけのために存在する。男という名の肉で構成された化け物。
その化け物に自分は「丸呑み」にされ、捕食されているのだ。
「おおぉ、出すぜ、おまんこに出すっ」
どくんどくんと熱いものが子宮に、そして直腸に注がれる。そしてスフィの頭を掴んで腰を振っていた男も、あっけなく口の中に精を放った。
（ああ……中に……）
逆流するザーメンを押し込むように、新たな陰茎が三か所に打ち込まれる。その欲望はまさに底なし、だがそれもモンスターならば頷ける。
オスという名の怪物に丸呑みされた哀れな獲物は、このまま延々と犯され続けるしかないのだ。
少女の心に諦めが忍び込むと同時に、若い女体はいつしか勃起した肉棒を受け入れていった。「じゅわっ」とお腹の奥から熱いものがこみ上げてくるのをスフィは感じた。
「はぁ、はぁ……ちんぽすごいぃ……」
反りかえる陰茎の裏筋にそって舌を這わせ、先端を強く吸い上げると、ぴゅるるっと白い体液が迸る。
スフィは音を立ててそれを啜りあげ、ごくりと甘露のように飲み干した。
「もっと……もっとちんぽ欲しい……おまんこにも、お尻にもちょうだいぃぃ～～っ」
一度受け入れると、あとは楽だった。

著者近況　最近、ダイエットに成功したと思ったら、なんだか冷え性っぽくなって、そのせいか肩凝りがひどいです。ああ、コメントが年よりのものだ（苦笑）。

腕利きの女ハンターは、まるで坂を転げ落ちるように、ただの欲情したメスに変貌していた。
「まんこの奥がとろとろだぜ！」
「ケツもいい具合にほぐれて、最高のケツまんこだ」
「そ、その赤毛を精液で真っ白にしてやるぜ！」
三つの肉穴だけでは飽き足りず、スフィは両手にもペニスを握っていた。そうして搾りとった白濁を全身に浴びて、悦びに打ち震えた。
「あぁあんっ、ザーメン臭くてとろけるぅうっ。もっとっ、身体の外も中もちんぽ汁に漬け込んでぇえ～～～っ」
どぴゅどぴゅと白濁が弧を描き、女ハンターの肌にびしゃりと貼りつく。
むっと立ち上る生臭い臭いを胸いっぱいに吸い込んだスフィの顔が、愉悦にうっとり緩む。
「あぁんっ、中に出てるっ、出されてるぅ！　おまんことケツまんこと胃袋で妊娠させられちゃうぅう」
それは既にハンターの顔ではない。牡肉のもたらす快感の虜となった、哀れな餌だった……。

2

ぬるりとした不快さの中で、スフィは目を覚ました。
この湿度の高さに覚えがある。空間の亀裂――D-CRACKの向こう側、D-EARTHの大気だ。
（暗い……ここはどこ？　あたしは、確かハンター仲間たちに襲われて）
記憶は一瞬でよみがえり、スフィの背中を冷たいものが走り抜ける。だが、すぐに異常に気づいた。
ハンターたちに襲われ、下着を剥ぎ取られて輪姦されたはずなのに、なぜか服を着たままなのだ。
（輪姦されたあとに、もう一度服を着せられた……わけないな）
あのくすんだ街でハンターたちに犯されたのは、夢だったのだろうか。
それに、今置かれている状況がわからない。ぬるぬるした肉のようなものに包まれ、耳に触手のようなものが差し込まれている。
「気持ち悪いッ」
スフィは耳の触手を引き抜いた。ただでさえ息苦しいのに、生臭い粘液が肌にまとわりついて不快だ。
しかもこの肉の壁は確かに脈打っているのだ。
（生き物の体内……!?）
嫌悪感が最高に達した瞬間、スフィの襟元の布地が「シャキンッ」と硬質化した。ナイフに変化したそれを両手に握り、一気に振り抜いた。
ずばぁあああんんっ！
肉の壁は薄紙のように切り裂かれ、光が差し込んできた。
「なに、ここは……？」
生き物の体内と思ったのは、間違いではなかったようだ。スフィが閉じ込められていた肉の袋から抜け出すと、そこはぼんやりした碧の光が照らし出す洞窟のような場所だった。
（ヒカリゴケの一種みたいね……それにあたしが呑み込まれていたみたいな袋がいくつもある……まさか！）
女ハンターは近くにある肉の袋を切り裂いた。中に閉じ込められていた男の顔に見覚えがある。夢の中でスフィを最初にレイプしたハンターだ。
「ねえ、ちょっと！　起きなさい！」
男の耳にもやはり触手が差し込まれていて、目は虚ろ、スフィの呼びかけにもまったく応じない。
ぞっとうなじの毛が逆立ち、スフィは男の耳から触手を引き抜き、頬面を数回ひっぱたく。
「う……ぁ……？」
「気がついた？　あたしのことわかる？」
徐々に男の目の焦点が定まり、スフィの顔を見ると、まるで夢から覚めたような表情を浮かべる。
「俺は……どこかの街で、あ、あんたはハンター・スフィか……？　おかしいな、俺は……あんたを襲っていたはずじゃ」
男の言葉に輪姦されていたときの記憶がよみがえる。膣と尻穴と口を同時に犯され、よがり狂っていたときのあの快感に、「じゅわり」と胎内の奥が疼く。
（この男はあたしを犯す夢を見ていたっていうの？　同時に同じ夢を見るだなんて、不自然すぎる）
だが、男が嘘をついている風には見えない。ハンター仕様の男の服、ズボンの前がもっこりと膨らんでいる。
彼がスフィを犯す夢を見ていたのは間違いなさそうだ。
「少なくとも今はあんたに襲われてない。それより周りを見て。あんたが捕まってたその肉の袋も」
「なんだこりゃ……もしかして生き物の身体の中なのか……？　そうだ、俺たちはメルラックに雇われて、鉱脈の近くに巣くうモンスターを駆除するはずだった……」
そう、モンスターの巣の近くまで行ったのはスフィも覚えている。なのに気がつけば見知らぬ街で目覚め、同じハンター仲間が性欲むき出しで襲ってきたのだ。
スフィが自分の体験を語ると、男は驚きに言葉を失った。
「そんな……あ、あんたはこうして無事じゃないか。お、俺はただエロい夢を見ていただけだ」
「ただの夢じゃない。この肉袋に閉じ込められた人間は、意識を共有しているのかも。他の袋にもきっと……」
スフィは次々と肉袋を切り裂いて、中に閉じ込められたハンターたちを救い出していった。
幻覚の中で自分に乱暴していた男たちを救うのは複雑な気分だったが、もしもあれがモンスターの能力だとすれば、彼らに罪はない。
（きっとあの触手で捕らえた獲物の意識を繋げて、あの夢の街で欲望を解放

著者近刊　「魔法少女W調教　フレイア&クリスタ」「引きこもり勇者のために美少女パーティーが一肌脱ぐようです」「乙女騎士団が隊の存続のために枕営業するようです」「お兄ちゃんが大好きな妹は実は「プロの妹」だったようです」「正義のヒロインと悪の女幹部が生中継でポロリするようです」　好評発売中！

厳かな王宮に漲る聖なる力！

司祭長セフィ

～闇に飲まれた聖域～

漫画COMIC／ぱふぇ

カリオストロ伯爵の謀反…

卿の主の噂を聞くがまことか

は…我が主におかれてはそのような噂初耳でして…

ほう初耳とな

近頃そちの私邸に多くの客人が集っておるようだが如何に？

く…それは

伯爵はその…

!!

危ない姫様！
魔族の刺客め!!
おのれ何やつ!?
聖導教会大司祭長セフィ！
この私がいる限り王に傷はつけさせません！
ギャアアアア
消えなさい！
聖光陣!!

魔族…
近頃 闇の胎動を感じていましたが
私がいながら魔の者を近づけてしまうとは
申しわけありません
センリも戻りませんし
やはり何かが…
邪な企てが動いているのだろう
魔との戦いは昨年終結したというのに…
司祭長には伯爵の審問をお願いする
は！
魔王復活をもくろむ魔貴族との戦争――
かつてこの私が封印した魔王…
蘇らせはしません！

カリオストロ伯爵――以上の嫌疑弁明の余地はありますか？

ははは！ご冗談を

我らに二心ありなどと根も葉もない噂

我ら一同バルドール王国の繁栄のため常に尽力しておりますれば

セフィ様も我らの同胞となり――

柔弱な王を廃して強き王に仕えましょうぞ

伯爵！貴方ともあろう人が魔に魅入られていたとは…

ま…魔族!!

なんてこと…

エルファシア姫様
勇者様……
伯爵の件大丈夫でしょうか
セフィ司祭様が心配です…
あの人は強い大丈夫
一緒に戦った俺には分かる
魔族だってただの残党さ
それに
魔族が何を企もうと
その甘言に乗じる人達がいようとも
必ずね
エルと王国は俺が守る！
アル…♡

魔の手はもう様々な所まで伸びている！
貴様も闇に堕ちろ！
司祭長ォ!!
魔の気配はなかった！
貴方は自ら進んで魔族に取り入ったと言うの!?
神のお叱りを受けなさい！

その御心のままに!!
神の十字架をあがめ!
尊み!
浄
聖
罪
芒

ルルルルルルルル
!!
貴女たちまで!?
そんな…
ズ…ズ
ズズ
ズ
ぎゅちゅっ
ぎゅちゅっ
闇を払う教会といえど
内に宿した闇には気づけぬようだな
やれ!!
ああっ
く…!

あ…ッ
いや！はなれな…
ひっ
や…だぁくすぐっ
早く放しなさい！罰当たりですよ!!
いいザマだな司祭長様♡
くッ!!

小説 NOVEL／清水勝治
挿絵 ILLUSTRATION／泡盛一太朗
大蛇に呑み込まれた姫騎士…
肉壁の内側で嬌声が響き渡る!!
選択肢でいろいろなエンディングが
楽しめる分岐小説！
姫騎士クレア
呑み溶かされるビキニアーマー
ご案内
この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1～5の番号がふられていますので、
シーンの小説本文末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。

シーン1

ステンドグラス越しに差し込む太陽の光がスペクトルとなり、中心に佇む姫騎士に降り注ぐ。

戴冠式が行われる礼拝堂では、本日の主役に輝かしい光が集まるように設計されていた。

その為、炎で炙られたように熱いはずだったが、彼女はうっすらと汗をかきながらも、石像のように微動だにしない。進行役の司祭の前で直立不動の姿勢を取っていた。

ただ、参加者の貴族達の好奇な視線だけは敏感に感じていた。

（私は普段、戦場にしかいないからな。物珍しいのであろう。……いや、それだけではないか……）

日頃は閑散としており、どことなく物悲しく荘厳な雰囲気の中、お祈りが行われる礼拝堂だが、今日は信仰心の高くない男達で溢れていた。

（ここぞとばかりに、噂が本当かどうか、私の姿を確かめにきたのだろう）

視線の大半は、貴族とは思えぬ、下賤で卑猥なモノだった。

（まったく、そういう目的の集まりじゃないのだがな……）

クレアは内心苦笑する。

出席者達は皆、正装をしており、ドレスなどで着飾っている。にも拘らず姫騎士の衣装と美貌は群を抜いて目立っていた。

それは、戴冠式の主役だから、ということだけではない。

クレアが、世にも珍しい純白のビキニアーマーを装着しているからだ。

丸く膨らんでいる両胸と股間部、お尻しか守られていない。言うならば、女の美点しか隠していないのだ。他に装備しているものといえば、同色の手袋とブーツのみ。非常に薄着であり、露出度が高い。

きめ細かく、見るからに質感のよい真っ白な肌を惜しげもなく、際どい部分まで晒している。幾多の戦場を駆け抜けながらに傷一つついておらず、それどころか、日にも焼けていない。

（全てはビキニアーマーの御加護なのだ。なにせ、私は生まれながらにビキニアーマーを装着していた、なんて噂されているのだからな……）

彼女にとっては、このビキニアーマーこそが正装であり、まさしく一心同体だった。

いかに司祭や貴族が潔癖でも、生物学的に雄である以上、彼女を見る目に厭らしいモノが混じるのは仕方がないように思えた。

クレアもその辺りの事情も十二分にわかっているつもりだ。

そう、姫騎士とはいえ、肉体はきちんと女として成長している。

少し動くたびに揺れる大きな双乳。大部分の柔肉は食み出し、深い谷間は丸見えだ。しなやかな腰つきとワザと突き出しているかのような見事な桃尻。鍛え抜かれた肉体と女性らしい柔らかさが見事に同居し、素晴らしいプロポーションを誇っている。

この場が礼拝堂で、戴冠式でさえなければ、場末の酒場で性的サービスをする娼婦だと勘違いする輩がいてもおかしくはない。

だが、もしもクレアが場末の酒場に居たとしても、その気品ある佇まいと全身から放たれるオーラ、流れるようなプラチナブロンドの髪と鋭さを持つ蒼い瞳に、一瞬かからず勘違いしたことに気づくだろう。

唯一、娼婦と共通点があるのだとすれば、非常に魅力的な女性であるということくらいである。

そもそもクレアは王族であり、姫なのである。一挙一動が凛々しく、楚々とした雰囲気に満ち溢れている。

「クレア＝ローゼンバーグ……今ここに王家に伝わる剣と盾を授与する」

司祭の威厳ある声の宣言に、クレアは無言で両腕を差し出し、礼式用の剣と盾を受け取った。

同時に、大きな拍手が巻き起こる。

クレアはその拍手に応えるべく、天まで届けとばかりに仰々しく剣を頭上に掲げる。盾は力強く、前に突き出す。同時に両胸が柔らかく震えた。

強さも美しさも気品も何もかも兼ね備えている者にだけに許されたポーズであり、そうでないと絵にもならない。

「私は姫騎士として、全身全霊をかけて、この国を守り抜くことを誓う」

拍手が一段と高くなり、大きな歓声が上がった。

クレアの人気は男女問わず、すこぶる高い。女性的な魅力でギラついた男を惹きつけるのはもちろんのこと、純粋な強さを求める男からも憧れられるほど、騎士としての強さを持っていた。女性からは美しさのあまり、嫉妬の対象にすらならない。

「……司祭様……次の段取りへ……」

司祭もクレアの深い胸の谷間を凝視していた。

「あ、あぁ……すまない」

誤魔化すように、わざとらしい咳払いをして、王冠を手に取った。

この王冠を頭に載せられたら戴冠式は終了し、パーティーが始まる。

本来なら、父親である王から受け取るのだが、すでに病死していた。

クレアはこの国を守れるのは自分しかいないと、言われて育てられ、それは王の遺言でもあった。

（あぁ……ついに私も、名実ともに国民に認められる時がきたのだ……）

彼女が姫騎士として認められたのは、男性が優遇される社会において、特例中の特例。ビキニアーマーなんぞ、騎士に向いていない、という声が多かった。だが、戦場で彼女の活躍を目の当たりにすると、考えは一変した。露出の高い姿に見蕩れていたが最後、敵の首から上は飛んでいる。

見かけに騙されてはいけないいい例だった。俊敏性と剣技にかけて、彼女の右に出るものはいないのだ。

今では、名実ともに騎士の資格充分で、礼拝堂内の拍手は鳴り止まない。
ただ、クレアにはそんなことよりも、父親の遺言を守れるのだという達成感のほうが大きかった。
「クレア＝ローゼンバーグのこれまでの功績を称え、姫騎士としての二つ名をここに命名する」
拍手と喝采が最高潮に達する。それらに負けないように、司祭は声を張り上げた。
「……ありがたき幸せ」
盛大な拍手の渦に包まれる中、クレアは感無量でその場に跪き、視線を落とす。
両目を閉じて待つも、何も起こらない。拍手も喝采もなくなり、辺りは厳粛な静寂に包まれる。
（んっ！　どうしたのだ？）
頭の上に、王冠が添えられるはずだった。
クレアは何かアクシデントが起こったのかと思い、顔を上げた。
「なぁっ！」
司祭が王冠を持ったまま灰色に染まり、ピクリとも動かなくなっていた。
（ただの硬直ではないな……これは石化か？）
その直後、ガシャーンとステンドグラスの割れる音が響き渡る。
「て、敵襲っ！」
入り口を警備していた近衛兵が叫びながら、礼拝堂へと駆け込んでくる。
「なにやつだっ！」
クレアが問い質す。
「そ、それが……」
報告しようとしたその者も、司祭と同じように灰色に染まり、時が止められたように動かなくなった。
「くっ！　警備の者達は一体、何をしていたのだっ！」
慌てふためき、逃げようとする貴族達も、次々と石化していく。
（ど、どういうことだ……）
ついに、その場で動いているのは、クレアただ一人となり、いつもの静かな礼拝堂の雰囲気へと戻った。
そこに、コツコツと、甲高い足音を立てながら優雅な足取りで、真っ赤なドレス姿の女が歩いてくる。
様々なポーズで立ち尽くす石像達は、その女を引き立てる装飾品のようだった。
女は戴冠式に出席するのに、相応しい高貴な雰囲気を身に纏っていた。
ただ、姫騎士のような気品さではなく、否応無しに男の情欲を刺激する高級娼婦のような淫靡さだった。
浅黒い肌に整った顔立ち。真っ赤な瞳が妖艶に輝いている。
美人には間違いないのだが、長い黒髪が不自然に四方八方に散らばっている。
「まったく、この国の男はロクなヤツがいないわね。歯ごたえもゼロ。でも、女の子は上玉揃いだから、いいわぁ。ねぇ、姫騎士のクレアちゃん」
「……」
同意を求められるが、答える必要はなく、ただただ、鼻にかかった甘い声が耳障りだった。
『ちゃん』付けされるなど、いつ振りだろうか。無礼なのだが、堂々とした態度で、逆に違和感がなかった。
「私としたことが、今まで、こんな可愛らしい格好してる姫騎士を見つけられなかったなんて、不覚だわぁ。どうして今まであなたの存在に気づかなかったのかしら……ちょっと悔しいわ」
ビキニアーマーを装着した肉体を、ジロジロと露骨に見つめられる。
「私をそんな目で見るんじゃない。それに、このビキニアーマーを侮辱する輩は誰であろうと許さんぞっ！」
「褒めてるつもりなのよ。こんなに可愛らしく育ったのに、変態露出狂みたいな格好してくれて。おかげで、私はそれを摘み取るだけでいいんだから」
と、今までで一番露骨で艶っぽい流し目を送られる。
男性であれば、それだけで陥落、石化していただろうが、クレアは女であり、姫騎士である。
少し身体が重くなった程度で済んだ。
「あら、やっぱり女にはあまり効果がないわね。それも強い精神力を持つ姫騎士であれば、尚更のようね」
「当たり前だっ！」
そこでクレアの頭の中に、伝説上でしか聞いたことのない怪物の名前が思い当たった。
「……メドゥーサ……なのか……」
ポツリと、呟く。
「あらあら、よくご存知ねぇ。この国ではあまり知られていないと思ったんだけど、姫騎士様は勉強熱心ね」
もとより、隠そうとも思っていなかったのだろう。女の不自然に乱れていた黒髪が、みるみるうちに真紅の蛇へと変わっていく。
「私はメドゥーサのアイラ。気軽にアイラって呼び捨てにしてね。敬意を込めて、アイラ様でもいいわよ」
「……何が目的だ。メドゥーサよ」
クレアはあえて名前では呼ばず、怪物の名で問いかける。
「そんなつっけんどんな態度しないで名前で呼んでよぅ。あなたの声で私の名前を呼ぶのが聞きたいのよぅ」
アイラが頭部の蛇達と一緒になって身体をくねらせる。
「……もう一度問う。何の用だ。メドゥーサよ」
ふざけた態度に一切、付き合わずにクレアは淡々と語りかける。
「もう、決まってるじゃない……私ね、この国が邪魔だから、滅ぼそうとしたんだけど、気が変わっちゃった。あなたを私のコレクションに加えてから、滅ぼすことにしたわ」
「どんな理由があろうと、この国に侵攻するモノは許さん。それに、私は絶対にお前のモノにはならん。私はこの国を命に代えても守り抜く」
「やだー、怖いわー。クレアちゃん、もうちょっと優しくしてよぅ」

著者近況　編集様と絵師様にご支援頂き、二兆倍面白くなりました。本当にありがとうございました。

「……くっ！　今すぐに叩き切ってやろうか……そのおちょくった口調で愚弄して……私の大事な戴冠式を台無しにしてくれたのだから、それ相応の報いは受けてもらうぞ」

少しの緊張感もないアイラに苛立ちを覚え、儀礼用の剣の先を向ける。

「それが貴様への罰だ」

「でもね、あなたがそんなことを言える立場なのかしら？」

挑発するように、アイラが言う。

「だって、あなたが守るべき人達はみんな石化しちゃってるのよ。人質なんて言い方は好きじゃないんだけど」

「どっちにしても、お前が死ねば元に戻るはずだ」

「ホント、姫騎士様は博識ね。そうよ。その通り。私が死ねば、み～んな元通りよ」

手の内すべてを晒すのは、決してそうならない自信があるからだろう。負けることはないと、確信しているのだ。

（私を甘く見て、油断しているな。それはそれで好都合というもの。侮辱した代償、払ってもらうぞ）

クレアは蒼い瞳を細め、メドゥーサを睨みつける。

「あらあら、そんなに見つめられても、私は石化なんてしないわよ。だって、あなたはビキニアーマーを着た可愛らしい女の子なんだから……それにしても、改めて見ても凄い格好ね。どこの店で売ってたの？」

「欲しいのか？　残念だが、どこにも売ってないぞ。私が生まれた時には、すでに装備していた、この世に二つとない品だ」

クレアがそう言って胸を張る。

「私が欲しいのはそれを着たあなた自身よ。それに、これは提案なんだけど、せっかくそんな厭らしい格好してるんだから、もっと、こう、なんていうの……女らしくも浅ましい雌みたいな顔したほうが似合うと思うの」

「この姫騎士クレア、生まれてこの方そんな顔したことがないっ！」

「そう、処女ってことね。それはそれは……楽しみだわぁ」

その情報に邪な思いが浮かんだのか、ニタァっと邪悪な笑みへと変わる。

「今から、女の良さを味わわせてあげるわ。極上の喜悦をね」

知らぬ間に、気色の悪い蛇が大量に床を這っていた。そこいらの森にいる蛇とは明らかに違う。赤黒い皮に白濁の粘液を滲ませ、まるで触手のようだ。

「さぁて、どうやって調教してあげようかしら」

床を這っていた蛇達が一斉に襲いかかってくる。

クレアは持っていた儀式用の剣を一薙ぎ、二薙ぎ、三薙ぎ。

切れ味は悪いも、そこは技術でカバー。腕よりも太い蛇触手達を華麗な剣捌きでなんなく叩き切っていく。

「あらあら、私の可愛い使い魔ちゃん達が紙切れみたいになっちゃって……姫騎士様は本当にお強いのね」

「よもや、この程度で私をモノにできるとは思っていないだろうな」

息一つ切らさず、クレアは余裕の笑みを浮かべる。

「それじゃ、これならどう？」

アイラが右手を高く掲げ、何かを呼ぶような仕草をした。次の瞬間、

「なぁっ！」

天井のステンドグラスを突き破り、見たことないサイズの大蛇が顔を出した。頭部だけで5メートルはあるだろうか。全長はどのくらいあるのか、想像もつかない。大きく口が割れ、赤黒い粘膜を覗かせている。口中では、巨体に負けないくらい大きく先端が二股になっている舌と、細かな蛇触手達が有象無象に気色悪く蠢いていた。

「この大蛇は女の子を捕らえることに特化してあるのよぅ。あの中に呑み込まれたら、一体、どうなっちゃうのかしらねぇ。……フフフ」

アイラが楽しそうに笑う。

大蛇はしゃーっと、音を立てながら舌を伸ばして姫騎士を威嚇する。生暖かく湿った吐息が頭上から降り注いだ。

「くぅっ！」

どうやってコイツを倒せばよいのか。考えている暇はなかった。

巨体に似合わない速度で、襲いかかられる。

「しまったっ！」

避けることに精一杯。間一髪、大口から逃れることができたが、剣も盾も手放してしまう。

「あら？　よく避けたわね。さすが姫騎士様ですこと……でも、次はどうするのかしら？」

戴冠したばかりの名誉を完全に馬鹿にした口調で言われる。

クレアは剣と盾を拾い上げようとするも、大蛇の巨大な舌が伸び、先にペロリと掬い上げられてしまう。

そのまま、ゴクリっと呑み込まれた。

「さぁて、次は一体何が飲み込まれるのかしら？」

剣と盾が、未来の自分を暗示していると、言いたいのだろう。

クレアの頬に冷や汗が滴り落ちる。

（どうする……どうすればいい……）

さすがの姫騎士も余裕がなくなっていた。

いくら、ビキニアーマーがあろうと、武器がなくなっては、限りなく勝ち目は薄い。

◆姫騎士たるもの、ビキニアーマーを信じて、最後まで立ち向かう。
⬇シーン2へ

◆さすがに状況が悪い。一時撤退して、体勢を立て直す。　⬇シーン3へ

シーン2

「たぁああああっ！」
クレアはメドゥーサに向かって、正面から突進していく。
「そんな単純な思考だから、ダメなのよ」
アイラは余裕の笑みを浮かべていた。
唐突に目の前に大蛇の顔が現れる。大きな赤い瞳で睨み、大口を開けて待ち構えた。
「ひぃいいいっ！」
食べられる、という本能的な恐怖心がクレアを寸前で立ち止まらせた。
だが、勢いづいていたクレアは慣性でつんのめり、大きな舌の上にビチャリっと顔面から着地する。
「むぐぅぅぅっ！」
新鮮で柔らかな肉感なのに、生温な湿地帯のようで気持ち悪い。
大蛇はそのまま口を閉じる。パックリと音がして、首から上が見事に大蛇の口内に嵌ってしまった。
「おぅぅぅっ！　離せぇええっ！」
そのまま吸引され、全身丸呑みされそうになる。クレアは汁塗れになった顔を上げ、ジタバタと両脚を暴れさせて、なんとか耐え忍ぶ。
結果、うつぶせ状態で上半身を呑み込まれたまま、身動きが取れなくなるという膠着状態となった。
（な、なんなのだ……このグロテスクな気味の悪さは……）
生き物の口の中に、放り込まれるなど未知の体験である。ムワっと音がしそうな生温かさと不快な湿度に、一瞬にして上半身が汗ばむ。悪臭に鼻の奥をツンと突かれると、健康体のクレアの免疫機能が働き、鼻水が滲み出て、そのまま垂れ落ちる。手の甲で拭うこともできない。
呼吸をするたびに、口と鼻、喉と肺に不快な空気が蔓延し、内部から穢されているみたいだった。
さらに蛇触手の唾液らしき液体が粘膜全体から、大量に垂れ落ちてくる。頭皮や耳裏、首筋、頬やうなじを這うように伝い、胸部を守るビキニアーマーの外側だけでなく、内側まで侵入し、素肌に張りつく。粘着力が凄まじく、柔肌にへばりついては、ゆったりと時間をかけて撫でるように流れ落ちていく。
ただ、それらよりも最悪なのは、外に飛び出したままの下半身がまったくの無防備なことだった。
「あらあら、姫騎士ともあろうものが、こんなに情けない姿になって……」
使い魔の内部だからなのか、メドゥーサの声はより明瞭に聞こえた。
「くっ！　う、うるさいっ！」
自身でも先ほどの行動が、少々間抜けだった自覚はあった。
「当然、私を誘っているのよね」
脹脛（ふくらはぎ）に指先を置かれた。そのまま膝裏から太股にかけ、愛玩動物にそうするように優しく撫で回される。
「ひゃぅぅぅっ！　そ、そんな訳ないだろうっ！　馬鹿っ！　やめろっ！　私に指一本触れるんじゃないっ！」
視界が遮られている分、皮膚感覚が鋭くなっていた。形のよい指の感触が鮮明に感じ取れる。好き勝手に触られる嫌悪感もあったが、同時に妙に背筋がソワソワもする。
「しっとりとして、指先に吸いついてくるわぁ。そもそも、お肌に自信があるから、そんな破廉恥な格好しているんでしょ？」
「ち、違うっ！　そんな訳ないだろうがっ！　このビキニアーマーは私の誇りだっ！」
下半身に意識を持っていかれた隙に、口内に生息していた細かな蛇触手達が身をくねらせながら近寄ってくる。
（な、なんだ……こいつらは一体、何をしようとしているのだ）
「ひゃぅぅぅっ！」
ぴゅるるるっ！　と、先端から白濁液が一斉に噴出された。ネトネトした粘液で、顔面が覆われる。一瞬にして生臭い匂いに包まれた。さらにビキニアーマーに守られた肉果実の枠線を描くように、根元をぎゅっと、強く締め上げてくる。
同時に、両胸と下腹部、ビキニアーマーと接触している箇所の肌触りが、妙に気になってくる。長年、装備しているが、こんなことは初めてだった。
（身体中の感覚が……神経が……過敏になっているのか……）
それが、顔面に吹きかけられた媚粘液の効力だとは気づかない。
「ぐぅぅぅっ！　こんなこと……いくらしても無駄だぞ……」
「フフフ……いつまでその毅然とした態度ができるのかしらねぇ」
抵抗することで、メドゥーサに余計な楽しみを与えてしまっていた。だが、クレアにはそうするしか自分のプライドを守る方法がない。
「ひゃぅぅぅっ！」
ビキニアーマーの上から股間を押しなぞられた。
「バ、バカ……そんな所、気安く触れるんじゃないっ！」
「いいじゃない。どうせこれから、徹底的に調教されて、最後には服従するんだから。そうして、一生、私のコレクションとして生きるのよ」
脳内に直接語りかけられているかのように、メドゥーサの甘い声がリフレインする。
「ていうか、なぁに……この上からでも、しっかりと感じるんじゃないの」
股間部を撫で回される。ビキニアーマーはそれほど薄い素材ではないのだが、メドゥーサの厭らしい指使いが何故だか鮮明に感じ取れた。
「んんっ！　ふぁぁんっ！　そ、そんなことない……」
口では否定するも、声色も確実に変化し艶を帯びていた。くちゅくちゅと、身体の奥底から滲み出た愛液で淫靡な音が鳴り始める。それは、クレアの耳にも確実に届いていた。

「ほぅら、ビキニアーマーの上から少しなぞっただけでもこの反応……弄りがいがあるわぁ……」

媚肉から溢れた愛液がビキニアーマーの中で溜まっていく。

「こ、これは何かの間違いだ……きゃううっ！」

身を捩じらせた拍子にトプリっと愛液が股間部から零れ落ちた。肉感溢れる太股を小川になって流れていく。

「あらあら、思ったよりも感じて濡れているようねぇ」

（馬鹿な……私がこんな屈辱的なことをされて感じているだと……どうしてしまったんだ……私の身体は…）

唐突にメドゥーサがお腹の辺りを優しく撫で回す。

「ふあぁあんっ！」

それだけで、下腹部全体をドスンっと、小突かれたような衝撃が走った。今まで眠っていた女が目覚めようとしていた。全身の血流が早くなり、大量の汗をかく。呑み込まれた上半身も、異様なまでの蒸し暑い空間に、酸素が足りなくなり、さらに息苦しくなる。

「さぁ、下準備も終わったことだし、それじゃ、そろそろ脱がしちゃおっかなぁ。クレアちゃんも泉のように愛液が沸いてくるんじゃ、気分が悪いでしょう」

軽い調子で股間部をガードしているアーマーに手をかける。抵抗することはできずに、中途半端な位置まで脱がされた。

「くぅうっ！　どうせなら、一思いに脱がせてくれ」

真綿で首を締められるような責めに、思わず叫んでいた。

「それじゃ、ダメよ。あなたは生まれながらにビキニアーマーを着ていたんでしょ。ソレがないとあなたじゃないわよ」

「い、今はそういう状況じゃ……」

「うわー、凄い臭い。無意識なんでしょうけど、肉体的にも精神的にも相当、溜まってるみたいね」

「ひ、人の話を聞けっ！」

ビキニアーマー内で蒸れ、愛液がふんだんに含まれた雌臭が空気中に発散していく。

「でもココはとっても綺麗なのね。素敵よ、クレアちゃん。……肉付きが薄くて割れ目もぴっちりと縦一文字に閉じていて、見た目よりも初々しいのね」

「くぅうっ！　……ふあぁっ！」

アイラの頭部に生えた蛇が伸び、器用に口で花弁を摘み上げ、左右に開封する。お風呂で洗う時ですら、躊躇する領域を無造作に触れられてしまう。

「ふあぁっ！」

膣内に溜まっていた愛液がドロリと、糸を引いて零れ落ちそうになる。

「あぁっ！　もったいない……じゅるりっ！　じゅるるるっ！」

アイラはいきなり女性器に唇を押し当て、愛液を啜り上げる。

「んじゅるるっ！　甘酸っぱくてとっても美味しいわぁ。これなら、いくらでも飲めちゃいそう」

「ひゃううっ！　そんなのが美味しいとか、正気か……お、お前は狂ってるぞっ！」

「そうなのかもねぇ。私のことをクレイジーサイコレズだなんて呼ぶ人もいるくらいだし……」

アイラはあっさり肯定する。

「なぁっ！　ど、どこの国の言葉だっ！　それはっ！」

「さぁ、知らないわよ。相手が勝手に呼ぶだけなんだから。あぁ、それにしても、ホント綺麗な色。少しも色にくすみがないものねぇ」

淫らな粘膜に愛液がさらなる艶と彩りを添え、陰唇全体がサーモンピンク色に輝いていた。

「……そ、そんなにじっくりと見ないでくれ」

「フフ……ちょっとはしおらしくなったようね。さてさて、どこから触ってあげようかしら……クリトリス、尿道口、膣口、肛門……迷っちゃうけど、一番感度がいいのはやっぱりココよね」

「ひゃいいいっ！」

包皮の上からクリトリスを優しく抓まれた。

飛び上がるほどの衝撃が走るも、すでに両脚は宙に浮いていた。クレアは全身のバネを利用して、ピーンと四肢を硬直させる。

「いい反応よ。……ココを弄られたら、抵抗は無意味。だって、ココは生きていくのには不必要なのに、何故だが女の身体にだけある不思議な器官なの。どうして、だと思う？」

「……はぁはぁ……知るか……そんなこと覚える暇があったら、剣の鍛錬でもする」

「答えは簡単、雌快楽を覚える為よ。だから、姫騎士様といえども、感じちゃっても恥じゃないのよ」

「ぎゃうぅぅうっ！」

再び、肉芽を押し潰された。雌快楽に全身が支配される。ビクンビクンと、快楽以外で動くことのない波打ち方を繰り返す。

（私の身体にこんな敏感な箇所があっただなんて……ソコを触れられると、どうしたって感じてしまう……）

「やめろぅうっ！　それ以上はダメだっ！　やめてくれっ！」

「あらあら、どんなことされても平気なんじゃなかったのぅ？」

「そ、それはそうだが……ぎゃうっ！」

「フフ……包皮も剥いちゃうわね」

「うぎゃうぅぅうっ！」

性感神経を剥き出しにされ、大蛇の口内に姫騎士の悲鳴が響き渡る。

「今まで、男の子の皮も女の子の皮もたくさん剥いたことはあるけど、あなたが一番、反応がいいわ。淫乱なのね」

「……だ、誰が淫乱だ……」

鋭敏な神経が集中し、ビンビンに尖ったクリトリスに触れるか触れないかの位置に指の気配を感じる。

（……ど、どうして……こんなことに

なってしまったんだ……）

姫騎士としての理性がぐにゃりと歪み始める。一番、マズイと思うのは、肉体だけでなく、心まで乗ってきていることだ。快楽を享受されることに、抵抗がなくなってきている。

もっと雌快楽が欲しいと、飢えた女体が訴えてくる。自制心は強いと自覚しているも、耐えきる自信はなくなっていく。

「早く触って欲しそうにしてるわぁ。宝石みたいにピンク色に光り輝いて、震えているんだもの」

愛液を掬い上げられると、それを潤滑油代わりに剥き出しの肉芽を激しく擦り上げられる。

「がゆぅううっ！」

肉芽から下腹部、背中にかけて、過電流が走り抜ける。上半身を大蛇に咥えられていなければ、エビゾリ状態になっていただろう。

「はぁあううっ！　あぁんっ！　これ以上は……ダメだぇっ！」

当然、自分でもこれほど強く触れたことはなく、姫騎士にあるまじき嬌声を上げてしまう。

「んぐぅうっ！んんっ！」

大きく開いた口にも大蛇の口内粘膜から滲み出た粘液が侵入する。吐き出す気力はなく、甘んじて飲み込んだ。

「小さな膣穴に、薄い膜が張ってあるのが見えるわ。やっぱり初物の女性器は特有の美しさがあるわね」

「わ、悪いかっ！　私はそのようなことに一切興味がない……うぅうぅ……くほぅうっ！　はぎゅうっ！」

ジュプリっと、音を立てて、すっかり愛液の泉となった膣穴に指を突き込まれた。クレアの膣粘膜はふやけてしまうほど、愛液に浸っていた。

「誰も悪いなんて言ってないじゃないの……もう、せっかちなんだからぁ」

「はうぅぅうっ！」

指一本なので、物理的にはまだ余裕はあるのだろうが、処女の姫騎士には巨大なイチモツを挿入されたぐらいの衝撃があった。

クレアの額に脂汗が滲み出る。

「まだ処女は奪わないであげるわ」

「ふあぁぁあうぅっ！」

メドゥーサの細長い指先が膣穴の浅い部分を這い回る。

「あぁ、とっても締まりがいいわね……それだけじゃないわ。自然と反応して、どんどんと馴染むように、締めつけてくる。……これは逸材ね」

「ぐぅうぅっ！」

「ココね……このザラザラした所……クレアちゃんのGスポット見つけちゃった」

膣襞の特に感じるポイントを探し当てられ、集中的に押し撫でられてしまう。

剥き身のクリトリスと膣穴を順次に責められると、性体験のない姫騎士に耐えきれる望みは薄かった。

（わ、私は姫騎士だぞ。メドゥーサの思い通りになるもかっ！）

それでも、今一度、強く思う。

ぎゅっと、歯を食いしばるも、膣穴から伝わる快楽で痺れてしまい、カチカチと音を立てて震える。

なんとか耐え忍ぼうとするも、ここぞとばかりに両胸に巻きついていた蛇触手達が動き出す。白濁液を吐き出しながら、上半身の至る所を甘噛みしてくる。当然、ビキニアーマーの中に滑り込み、性感神経が集中する、知らずに勃起していた乳頭まで吸いつかれる。

「あぎぃいいいいっ！」

さらにクリトリスをメドゥーサの髪が変化した蛇触手に啄ばまれた。吸いつかれたのか、噛みつかれたのか、全身で発生する快楽電流が入り混じり、感覚が混同する。

人間の男性ではあり得ない愛撫と悦楽にクレアは呑み込まれていく。

「いいわよぁ……膣肉がうねうね蠢いて、とっても気持ちよさそうね。このままイケそうじゃないっ！　いいわよ、遠慮しないで、イキなさいっ！　ほらっ！　早くっ！」

メドゥーサの命令に、蛇触手達の動きが一段と激しくなる。

「あひゃうぅぅうっ！　何かくる……きちゃうのぅうっ！」

クレアは両乳首とクリトリス、Gスポットを同時に刺激され、人生初のオルガズムを味わわされた。

頭が真っ白に染まり、何かに身体が奪われたように、勝手に四肢が痙攣する。女性器全体が熱くなり、膣肉をうねらせながら、ジュジュジュっと、愛液が噴出させる。

「はぁうっ！　ふあぁんっ！　あぁんんっ！」

呼吸が乱れ、熱い吐息が漏れるも、すべて大蛇の口粘膜に吸い込まれていく。

「どう？　初めて女の悦楽を味わった感想は？」

まだ完全には、絶頂が収まらない中で問いかけられる。

「はぁはぁ……この程度のことで……いい気になるな。自分には生まれながらに、姫騎士としての使命があるのだ。こんな官能的な行為に屈する訳にはいかない……はぁはぁ……」

「それじゃあ聞くけど、あと何回くらい無理矢理イカせたら、あなたは素直に私のコレクションに加わってくれるのかしら？　んちゅっ！」

アイラは頬にまで飛沫した絶頂恥液を長い舌で美味しそうに舐め取った。

「それともこのまま生きながらにして、大蛇に呑み込まれて骨まで溶かされたいのかしら？　改心して、私のコレクションの一部になることを素直に誓うなら、許してあげてもいいわよ？」

◆誓う　⬇シーン4へ
◆誓わない　⬇シーン5へ

——京の都——

小さな彼女の先祖はかの有名な——!?

ふむ…

今回の怪異の報告書はこれでよし…と

こちらにいらしたかチハタ殿

む…

お館様の間諜ですか

何用です

…突然失礼した何分火急の用にて

先刻 退魔師協会から鬼退治の要請が下った

チハタ殿の故郷にほど近い場所で人を喰う悪鬼が出現したらしい

先日都に出没した鵺を撃退したばかりだというのにまた私が出向くほどの物怪ですか?

私を小鬼と呼び捨てた村の事などどうでも良いですが…あちらは別の退魔師の管轄でしょう?

勿論要請したさが既に失敗しておる命からがら逃げ帰ったとの顛末だ

——その折 悪鬼が一寸法師殿への恨み言をこぼしていたのを聞いたと…

…!!

一寸先は闇堕ち

漫画 COMIC 冬扇（とうせん）

なるほど
それで私ですか…
ご先祖様の
倒し損ねた因縁の相手…

…了承しました

かたじけない…
被害が今も拡大している
すぐにでも出発して
もらいたい

…確かにこの小槌は
強力な魔道具ですが
まだ私は完全に
使いこなしてはおりません

武器召喚が精々です
とはいえ…
既にご先祖様が負かした鬼に
負けるつもりもありませんが

ちんまい侍、
出陣――！

ガタ…

並の退魔師では
敵わずとも…

チハタ殿の力と
魔法の小槌が合わされば
悪鬼など問題ないだろう

…過信は
しないでください

その武器こそが
幾多のあやかし共を
斬ってきたのではないか

小さいなりをしながら
まこと感服仕る

小さいって言うな…
お前より年上だぞ

…では
行って参ります

3尺

…くれぐれも
お気をつけなされよ

無論です
留守を頼みましたよ

——チハタの故郷——

…貴様が件の悪鬼か
ここの村人はどうした

あァ？

残念だったのう
ここいらの人間なら
とうの昔に喰い尽くしたわ

丁度腹が減ってた所だし
貴様も喰って…ん？

その小槌…
まさか…

…そのまさかだ

我は天火千幡（アメノホチハタ）
誇り高き
神魂命（カミムスヒ）の末裔である!!

ご先祖様が見逃してやった
恩も忘れ再び悪事を働くなど…
到底赦せぬ!!

人を喰らう鬼は
屠られるが世の定めと心得よ!!

覚悟!!

…ようやっと見つけたぞ
小娘 あのチビ侍の子孫じゃな

この鬼…なんて硬さ…!!

なっ!?

この数百年…貴様ら一族を恨み妖怪を喰らって力を得てきたのだ

貴様程度の退魔師の刃など…小槍の補助を受けていようが儂の体には傷一つ付けられんわ

うぁっ…!?

どれ貴様も喰ろうてやろう

やばっ…か…噛まれる!!

ぽろっ

ぽろっ

ぽろっ

さんざん探しても見つからぬからやきもきしておったが…ついに恨みを晴らす時が来たのう

ひっ…!?ややめっ…

ぐんっ

早く中に…!!

もぞっ

もぞっ

外では勝機がなくとも…ご先祖様のように鬼の内側から攻撃してやる…!!

ぐにぐに

…よしうまく噛まれずに中に入っ…
って狭っ…!?
なんで…
ここんな窮屈じゃろくに体も動かせない…っ
そうか…
私ご先祖様より体が大きいから…
残念だったのう…チビ侍のように腹の中で暴れるつもりだったか？
このままおとなしく呑み込まれてしまえ
んっ…
くくそっ…
肉壁が蠢いて気持ち悪い…っ
あ…
体がどんどん下に動いていく…
ここのままではまずい…
胃まで流される…!!

こんな鬼に消化されてたまるか…っ

!!

…しぶといのう喉につっかえておる

ふうむ…粘るそのうち力尽きるだろうが…どれ

小賢しい

んっ!? んーっ!!

ただ喰らうのも面白くないしの

鬼の酒を浴びてみよ

な…何か飲まれた!?

んぐっ!?

流される…っ

淫魔の皇女

漫画 COMIC おおたたけし

凛々しき姫騎士は魔を追い詰めるか！

その剣 空に蒼き雷光を轟かす…

さすが 聖剣に選ばれし 皇女殿

我が蛇どもが 屍の山か…

私がいる限り 皇国は滅びぬ！

来い！ 魔を振りまきし 男よ！

一刀両断にして くれる！

エルダナ姫…様…！

ゴゴ

ゴゴ

ゴゴ

ゴゴ

は、

は、

は、

そ…
その声は！
騎士団長！
よくぞ
生きて…
何っ!?
き…貴様
彼女に…何を
…した…っ
ククク…
！

う…

…！

ここは…!?

な…!?

精鋭の十二騎士たち…!?

お目覚めか

聖剣の皇女よ

従順な淫魔兵どもは街を滅ぼしてきたばかりでね

彼女らの戦闘力に比して淫猥な本性がむき出しになってしまって操るのもひと苦労だよ

君が今一度彼女らの主になってくれれば助かるのだがね

そう…

…！

貴様 彼女らを魔に堕としたのか!?

淫魔の皇女にね！

く…っ!!

貴様の…思い通りにはなるものか……っ!!

ククク その意気ですよ 皇女様

せいぜい楽しんで下さい

私直々に調整を施した悪食蟲(ワーム)をね！

…っ!?

にゅう

……！

せ…っ

聖なるヨロイが…っ!?

苦労しましたよ
そのヨロイを破る体液を創り出すのは
…ドウヘンジからだいぶ
貴女の身体を造りかえていきますからね

んっ
ぐっ
びゅー
びくくん…
びゅる…
強引に何かを流し込まれてる…っ!!
んふっ
ぎゅる…
んっ
い…息が…っ!!
ずくー!!
んっ
ぐーっ
ずぽ
ずぽ
ぷっ
ぷっ
ぷっ
あっ
うあっ
めりめりっ…
やめっ
やめてぇーっ!!

守ってきた人々に晒される
正義のヒロインのレイプショー！
エレメントディーヴァ
精霊歌姫
セイレーン・ミカ
小説 NOVEL／ヤミヨ
挿絵 ILLUSTRATION／天地争覇（てんちそうは）

「これで終わりです」
荒れ果てた繁華街の中心で、多くの人たちが固唾を呑んで見守る中、決着はついた。
人々の視線の先に映るのは二つの人影だ。一つは三メートル近くという真っ黒な毛で覆われたゴリラのような化け物。突如この世界へと侵攻してきた異世界の怪人だ。
この半壊した繁華街もこの怪人の仕業であった。しかし、そんな闇の住人も今は尻餅を突いてしまっている。そして、怪人の喉元にはロッドの鋭い先端が宛がわれている。
自分の身長よりも長いロッドを構えるもう一つの影は、腰まで届く青髪を後ろで一纏めにした一人の少女だ。
十代後半と言ったところだろうか、倒れる怪人に向けた落ち着いた声色とは裏腹にその表情には少女特有のあどけなさが残っている。
それでも怪人に向ける切れ長の碧眼や、整った鼻筋からは気品が伺えた。さらに、胸に実る魅惑的な二つの膨らみに、キュッと締まった腰の括れから続くヒップライン。全てが黄金比を思わせるような美しく均等のとれたスレンダーな身体。それはまさに美少女と形容するに相応しい。
そんな美少女の身体を包む衣装は風変わりなものだった。身体にぴっちりと張り付いた純白のレオタードに、水色のミニスカート。スカートから伸びた美脚をより引き立てるかのような青色のハイヒールに、肌に吸い付くような水色のロンググローブ。
胸や腰には、まるで魚の尾ヒレを思わせるかのような水色のリボンによって着飾られ、胸のリボンの中心には彼女の瞳の色と同様の蒼い宝石が埋め込まれている。
彼女の名前は精霊歌姫（エレメンティーヴァ）セイレーン・ミカ。人々の負の感情を糧にする異世界の侵略者から、この世界を守る美少女戦士だ。
「ま、待ってくれ、俺の負けだ、命だけは……」
街で暴れた凶暴な怪人は、精霊歌姫の力の前に破れ、両手を上げた。
「もう人は襲わないと誓いますか？　誓うのであれば、貴方の事は見逃しましょう」
「わ、わかった、誓う！　誓うぞ！」
怪人の言葉に、ミカの動きが止まる。精霊歌姫と呼ばれる少女であったが、普段は心優しい女学生なのだ。闇の住人であれ、できる事ならば命は奪いたくない。だが、怪人の言葉を信じ武器を下ろそうとした瞬間、それは起こった。
グチャッ！
「――んあっ⁉」
ミカの首筋に向かって怪人の影に隠れていた何かが飛び掛ってきたのだ。
それは、珈琲ゼリーのように真っ黒な身体の中心に、目のような真っ赤な核を浮かび上がらせているスライム状の魔物だった。
警戒心が解けかかった変身少女は、不意に飛び掛ってきたスライムに対応できず、身体への接触を許してしまう。
ガシャンッ！
「な、なにっ⁉」
首筋に走る冷たい感触に驚いている間に、スライムの身体は予想だにしない変化を遂げる。ブニョブニョした柔らかな身体は硬質化し、その姿も変身少女の首を覆い、真っ黒な首輪となる。
「これは……、と、取れないッ！」
首輪へと変身した魔物を引き剥がそうとするミカ。しかし、固く変化した魔物はどんなに力を込めても外れはしない。
「へへっ、どうだい俺からのプレゼントは？　お高くとまった譲ちゃんにはお似合いじゃねえか」
「あ、貴方……、私を騙したの……ね……」
首輪を嵌められ戸惑う変身少女に、怪人は立ち上がると、下卑た笑みを浮かべた。
そんな怪人の態度から、先ほどまでの命乞いが全て演技だと悟り、ミカは怪人を睨み付ける。
「馬鹿めっ、この俺様が降参なんてするわけないだろう！　ほらっ、もっと俺様からのプレゼント受け取りな！」
怪人の言葉と共に、物陰に身を潜めていたスライムたちが一斉にミカの身体へと飛び掛る。
「きゃぁッ！」
グチャッ、ベチャッ！
あるものはフェティッシュなレオタードの上から彼女の豊かな胸やお臍へ、またあるものは白い肌が剥き出しになった背中やすらりと伸びた脚。さらには二の腕やロンググローブに覆われた手にもグチョグチョと身体を脈動させながらへばりついていく。
（しまった、首輪に気をとられて、反応が遅れ……）
「はぅんっ、ふぅ……んんっ！」
ちょっとした事で隙をつくってしまった自分の未熟さに舌打ちをしながらも、スライムたちのひんやりとした感触に、普段とは違い可愛らしい声を上げてしまう。
しかし、驚いている暇など彼女にはない。身体に纏わりついたスライムたちにすぐさま変化が訪れる。
グチュッ、グニュ、グニュニュッ！
「あんっ、んん……っ、く、擽った……い……」
まるで無数の唇に吸い付かれ、舌で舐められているようなこそばゆい感覚に、眉を八の字に曲げ、堪らず身を捩るミカ。
「そいつらは負のエネルギーの他にも、お前ら人間の老廃物が大好物なのさ！　たっぷりそいつらに綺麗にしてもらうんだな！」
「なっ⁉　ふ、不潔な……ッ！」

スライムに自分の垢を舐められていた事を知り、ミカは恥ずかしさに顔を真っ赤にする。
「へへっ、早くなんとかしねえと、そいつらは何でも食べちまうぜ！　ほらっ――」
「くぅぅ……、んっ、な、なに――ッ!?」
ジューッ！
ミカの鼻を掠める、焦げ臭い匂いと煙。自分の衣装に慌てて目をやると、スライムが纏わりついたレオタードが変色し、まるで虫食いのように小さな穴が空き始めていた。レオタードだけではない、唯でさえ短いスカートの裾もボロボロに溶かされ、今にも股布が見えてしまいそうになっている。
「そ、そんな……、正義の衣が……」
「ほらほら、早く引き剥がさないと剥かれちまうぜ」
今まで共に戦ってきた正義のコスチューム。それをこんなスライムなんかに溶かされ、食べられてしまうなど決して許せる事ではない。
「は、離れなさ……い……ッ！」
肌を舐められる擽ったさに耐えながら、ミカは身体に纏わりついたスライムたちをはらいのけようと、魔を払う浄化の歌を紡ごうとした。その瞬間――、
ギュゥゥッ！
「んぐっ、ぐぅぅ……ッ！」
スライムが変化した首輪がきつく喉を締め上げる。
（こ、これじゃ……、歌え……ない……）
スライム首輪は変身少女の気道を塞ぎ続ける事はなかったものの、ミカが浄化の歌を紡ぐ瞬間を見計らってきつく締まるのであった。
「貴様の技なんてもうお見通しなんだよ、そいつが首についてる限り、お前は歌う事はできねえ」
「くぅぅ……ッ」
必殺技を封じられた正義のヒロイン。そんな彼女をさらなるピンチが襲う。
片手で駄目ならば両手で、変身少女が武器であるロッドを親指で挟んで持つと、残った右手も首輪に近づける。しかし、それがいけなかった。
ガチャンッ！
「なっ!?　そ、そんな――」
スライムの魔物は首輪に変化した時同様に、彼女の両腕が近づいた瞬間、その姿を変えた。硬質な腕枷へと変化すると、ミカの両腕を一纏めにして拘束してしまう。それだけではない。腕枷からは鎖が伸び、首輪へと結びついた。
「あっ、くぅぅ……、そんな両手まで……はぅぅンッ、う、うぅ……」
両腕の自由まで奪われた正義のヒロインの身体を、勢いづいたスライムたちが弄り始める。
「んあっ、そんなとこ……ろ……っ、んあっ！　だ、駄目よ……、ふんぅぅぅッ！」
「ゲヘヘッ、そんなに動いちまっていいのか？　見えちまうぞぉ～」
「～～ッ！」
スライムたちの脈動に苛まれ、眉を顰めるミカ。肌に感じるこそばゆさも、変身衣装の虫食いも大きくなっていく。特に胸の辺りは酷く、コスチュームに空いた穴から溢れ出す柔らかなそうな乳肌の面積が広がっていく。
乳房に感じる擽ったさに身を捩るも、下手に身体を動かせば怪人が言うように、可愛らしいピンク色の突起が見えてしまいそうで、魔物たちを振り解く事ができない。
気になるのは怪人の目だけではない、周囲に目を向ければ、ピンチに陥ったヒロインを心配そうに見つめる人たちの姿がある。
信じてくれている人たちの為にも恥ずかしがってなどいられない。そう思っているはずなのに――、
プルンッ！
「あんんっ、そ、そんな……胸見えて……ッ、も、揉まないで……ぇ……」
スライムに胸部が溶かされ、締め付けを失った柔肌が溢れ出せば可愛らしい声が出てしまう。
さらに柔らかさや張りを確かめるように、スライムが胸を揉み解せば、粘液に濡れた柔肌がプルンッと揺れる。
スライムが肌を撫でる掻痒感から逃れようにも、両腕を封じられている状態では魔物を引き剥がすどころか、胸を隠す事すらできない。そうなれば、やはり周囲の人たちの目が気になってしまう。
（くぅ……、胸、皆に見られて……、変な声も出ちゃ……うぅ……っ……）
「おいおい、俺様の事を忘れてるんじゃねえか」
「へっ？　キャァァッ！」
スライムに翻弄されるミカの華奢な身体を怪人が突き飛ばす。首輪と腕枷を繋げられた状態では、受身もろくに取れず、あっけなく転倒してしまう。
グチュッ、シュルルッ、ガシャンッ！
「なっ、う、動かないッ!?」
そんな彼女を襲うさらなる悲劇。地面と接触した腕枷がまるでその場に溶接でもされてしまったかのように、アスファルトの地面にくっつき離れなくなってしまう。それだけではない、青いハイヒールを履いた両足も地面にガッチリと固定された。
「クケケッ、随分、いい格好になったじゃねえか！」
両手を地面に固定され、腕枷から伸びた鎖で頭も上げられない。お尻は大きく上げ、膝をついた体勢で両足も開いたまま固定されてしまったミカは、怪人にお尻を向けた恥ずかしい屈服体勢のまま動けなくなってしまった。
「こんな格好……は、離しなさい、さもないと……」
お尻を高く上げた姿勢のせいで、短いスカートはすっかり捲くれ上がり、股布に包まれた下半身が露出してしまっている。あまりにも恥辱的な状況に、

著者近刊　『天唱鳳姫カリン　淫辱に舞い堕ちる翼』　好評発売中！

普段の落ち着いた態度の彼女とは思えないほどに、顔を真っ赤にしてうろたえている。
そんな正義のヒロインの慌てふためく態度が楽しいのか、ゲラゲラと怪人は笑う。
「さもないとなんだ？　こっちにケツを向けた状態じゃ怖くもなんともないぜ」
「はうぅぅンッ！」
パシンッ！
周囲に響く小気味の良い音。怪人のゴツゴツした手が、高く上げられた変身少女のお尻を叩いたのだった。衝撃に波打つ尻肌、突然の出来事にミカの口から可愛い悲鳴が上がる。
「おっ、可愛い声で鳴くじゃねえか、どれどれ、形も大きさも申し分ない尻だな。おぉ～、柔らけぇ～」
「くぅンっ……痛ぅぅッ……うっ！」
力任せに尻肉を揉まれ、純白のレオタード衣装が次第に尻の谷間や股間へときつく食い込んでくる。尻谷に伝わる痛みと、怪人に好き勝手自分の身体を弄られる不快感から逃れようと、必死に身を捩る変身少女。しかし、両手両足が固定された状態では突き上げた腰ぐらいしか動かす事ができない。
「へへっ、そんなに腰を振っておねだりしなくたってたっぷり揉んでやるよ」
「ち、違っ、はぅぅ……くっ、んんっ、あァ……」
しかし、変身少女の必死な抵抗も、怪人は下品に笑い飛ばす。
「ふぅんんっ、んぁ、あぁ……、ふぅあああァァァ……ぁ……」
執着にヒップを揉み解され、レオタードが少女のもっとも大事なところに食い込み、秘唇やその上で自己主張を始める淫核を刺激する。
突き出し、揉み解されたお尻に走る痛み以外に、腰に走る甘い痺れ。清楚という言葉が似合うとおり、今まで自慰の経験もほとんどない彼女にとって未経験な感覚に、ついつい変な声が漏れてしまう。
「じゃあそのいやらしい声はなんだ？　ほら、周りの奴らもお前のいやらしい姿を見てるぜ」
「くぁ……っ……、見ないでくだ……ひゃんっ！」
怪人の言葉に耳を貸し、周囲に目をやれば、街の人たちの視線が恥ずかしい格好で拘束されたミカへと注がれていた。
下半身に走るこそばゆい感覚に身悶える変身少女は、自分の痴態が多くの人の目に晒されている事を再確認し、あまりの恥ずかしさに声を荒らげる。
そんな恥辱の変身少女の尻に、パシンッ！　と再び怪人の平手打ちが飛べば、柔らかな尻肉を通して伝わる衝撃に尻辱のヒロインは言葉を詰まらせた。
「なに勝手な事言ってやがる。もっとテメェのそのだらしない姿を見てもらうんだよ！　オラ、人間ども、お前たちが正義のヒロインと称えるこのお譲ちゃんが敗北する姿をよぉ～く見ておくんだな！　おっと、逃げだそうとしたらぶち殺すぞ！」
パンッ、パンッ！　と変身少女の尻を叩きながら、嘲笑う怪人の脅しに、逃げ遅れた人々は足を止める。
変身少女を貶める為に行った怪人の行動。だが、それは逆に高貴な正義のヒロインが冷静さを取り戻すきっかけとなった。
（そうよ、私がだらしない姿を――、弱気なってしまえば周りの人たちも不安にさせてしまう）
清廉潔白な変身少女にとって、一番大事なのは、守るべきは街の人々だ。皮肉にも怪人の脅しによってそれを思い出したミカは落ち着きを取り戻す。身動きが取れないものの、背後の怪人を睨み付ける。
「私にどのような事をしても無駄です。セイレーン・ミカは、いえ、正義は決して屈したりなどしません！」
「チッ、本当に生意気な小娘だ。まあいいその強がりがいつまで続くかな、グヘヘッ」
お尻を掲げた恥ずかしい体勢でありながら相変わらず生意気な口を聞く変身少女を屈服させようと、怪人の太い指が、コスチュームが食い込む秘唇を撫で上げた。
「あっ、くぅぅ……そ、そんなとこ……ふぁ……んっ、んぅ……」
怪人の指先が淫裂を往復すれば、股間にはゾクゾクとした妖しい掻痒感が走った。お尻を揉まれ、コスチュームが食い込むたびに感じていた時よりも強い刺激に、ビッ、ビクンッ！　と思わず腰がはねてしまう。
「へへっ、なんだぁ～、早速降参かぁ～」
「そ、そんなわけないでしょ……き、気持ち悪くって……驚いただけ……よ……うんぅぅ……ッ」
怪人の指がコスチューム越しに秘肉に擦れるたび、股間へ走る痺れに似た感覚。そして、まるでサウナにでも入ったかのように身体が火照っていく。
爪で媚肉を引っ掻かれれば、腰が小刻みに揺れ、尾ヒレのような腰のリボンがか弱く揺れる。
指が秘唇を往復するほど、刺激はどんどん強くなっていく。肌も桜色に染まり、額には玉のような汗が浮かんだ。
「どんなに強がってもやっぱ女だな、牝臭せぇ匂いがしてきやがったぜ！」
怪人の言葉に、ミカは瞳をギュッと閉じる事しかできない。
このままではいけない、感じては駄目だ。そんな事を頭の中で何度も自分に向かって言い聞かせても、股間を打つ未知の刺激に、身体はより敏感に反応してしまう。クチュッ、クチャッといやらしい水音が耳に届き、怪人の指が秘裂の奥に沈めば、顔が上がり、腕枷と首輪を繋ぐ鎖がピンッと伸びた。
「どうやら正義のヒロイン様は淫乱みたいだな、ちょっと弄っただけでこんなに愛液が漏れてきたぜ」

最新コミックス第2巻好評発売中！
思春期なアダム
第16話
EVIL EYES
んんっ…
あ……
ンあっ……！
や…も…
やめっ…
おひり…
…らめっ…
睦…月い…！
AMAGAI YUKINO
天海雪乃
原作 さかき傘
web版コミックヴァルキリーでも連載中！
http://www.comic-valkyrie.com/

前号までのあらすじ
蛇眼を持つ睦月と彼を護衛する天使少女エンジュを囚えた、FeTUSの刺客・黒猫。彼女は睦月を操り、アダムの精液を採取するため、エンジュの尻に射精させようとするのだった。
いいぞ……その調子だ
天使の尻に精子をたっぷり注いでやれ
はぁ
はぁ
それにしてもなんて強力な蛇眼の力……
はぁ♡
はぁ♡
影響力を緩和させるこの眼鏡越しでも
カラダが熱くなって狂いそうだ…
くちゅ♡
くちゅ
こんなこと初めてなのに…
パンッ
すごく恥ずかしくて嫌なのにぃぃ
パンッ
はっ
すごいぃ…
奥に…奥にくる…っ
はぁ
ビクッ♡

はぁ…
おひり…ひろがっちゃって……
あ…あ…だめっ…もっ…もう……
はぁ
い…いいよエンジュ……
僕も…だすよっ
あっ…そんな突いたら…っ
はぁっ
…くる…なんかきちゃうぅぅ

ビクッ
ビクッ
ビクッ
ああああっ…!!

ガク
ハァ…
ぼ〜
ハァ…
ハァ…
…ニャっ!?
また目的を忘れるところだった
コツ
…おとなしいうちに連れて行くか
アダムはもちろん
アダムの精子が入ったこの娘も一緒に……
……よせ

僕のエンジュにさわるな
ッ!?
なん……だ?
腕が勝手に動いて……
迂闊ねぇ

女なのに長く
睦月君のそばに
いるなんて

完全なる男性の力が
蛇眼なんて
チャチぃものじゃ
ないことくらい
知ってるでしょう？

コツ…

彼がその気に
なれば存在
そのものが

**すべての女性を
支配するのだから**

く……っ

もう貴女は
睦月君を
操れないし

命じられた以上
エンジュには
触れないわ

識閾下に
彼の存在が
刷り込まれて
しまったもの

高貴なる魔女クラウゼア
淫堕の異端審問
第二話 悪魔審問
護国の魔女を貶める衆人環視の審問開始!!
小説 NOVEL 大熊狸喜（おおくまたぬき）
挿絵 ILLUSTRATION しゅんぞう

ギー司祭の乗る馬を先頭に、捕らえられた漆黒の魔女の連行が始まった。

両手を背後に拘束されて、生まれ育った森から徒歩で連れられてゆく、クラウゼア。

艶めく唇には、猿ぐつわを噛まされている。

（お母様……）

この森は、先代の王ニューフオウ直々に、クラウゼアの母、アストリアに与えられた土地だ。

ヒノモトから渡ってきた母が安住の地を求めていた時、謎の武装集団に追われていたニューフオウを助けた事に対する、感謝の証だと言う。

（先代王と母の名誉を、護らなければ…っ！）

細い首に巻かれたシンボルの首輪から繋がる鎖を引かれながら、クラウゼアは身の潔白を証明せんと決意をしていた。

一週間ほど前に訪れたばかりの城下町に、再び連れられた魔女。町は既に夕闇に包まれていて、東の空には美しい星がきらめき始めている。

「ク、クラウゼア様……」

「なんというお姿……」

町の人々は、後ろ手で拘束されて首輪を引かれる美しき魔女の姿に、悲しみを禁じ得ない様子だ。

両腕を背中で縛られているから、黒いマントも背後で纏まっていて、肢体を隠せない。

一歩踏む度にビスチェに護られた爆乳が揺れて、丸い巨尻が左右に振られて、しなやかな腿が交互していた。

先頭の馬に跨がるギー司祭は、あくまで穏やかな表情を崩していない。

繁華街を抜けて町の中央広場へと連れられると、政府発表などに使用される小高い壇上に、豪華な椅子と拘束台が設置してあった。

拘束台は、幅が二メートル、高さが三メートルほどの、金属製の枠だ。椅子には衛士たちに護られたグルーク王子がふんぞり返り、側には宰相のガギロギアが待ち構えている。

テリィボル神教の白い装束に身を固めて、潔白性を演出しているグルーク王子。

いつもの女たちが足下に縋り付いていないのは、流石に公衆の面前だからだろう。

そういう対面的な小細工さえ、単細胞な王子には思いつく事も無い。きっと宰相の入れ知恵だ。

拘束されたビスチェ魔女の姿に、王子は下品な興奮を剥き出しにしている。

「おおおっ、クラウゼアよっ！　縛られ苦悶するお前も、また格別に僕を興奮させるぞっ！」

いつも通り、女性が嫌悪する言葉をナチュラルに吐き出すグルークだ。

苦悶する美顔と、爆乳とヒップばかりに目を奪われる王子を余所に、小男の宰相はギラついた眼差しで、司祭を労う。

「ギー司祭殿。悪魔信者の拿捕、誠にご苦労でありましたな」

下品な笑みを浮かべるガギロギアに、司祭は涼しい顔だ。

「これも国民に対する神教の務め。全ては神の命ずるままに」

まるで自分の手柄のように、シレっと述べる神教の司祭。

対して、唇を塞がれている魔女には、弁明の余地すら無かった。

「んむむ……」

「では、魔女をこれへ」

司祭の命令で、武装教徒たちの剣で背中を突かれるクラウゼアは、壇上への階段を上らされる。

見回すと、町の人々は不安と祈りの表情で見上げていた。みな、クラウゼアを信じているのだ。

「クラウゼア様……」

（みなさん、ありがとう……）

人々の想いを感じると、魔女の目にも力強い意志の光が宿る。

首輪の鎖が拘束台に繋がれると、司祭が壇上に上ってきた。

そして人々に向かって、恐ろしい宣言をする。

「これより、悪魔に通じた魔女クラウゼアに対する悪魔審問を開きます。これにより、魔女クラウゼアが悪魔との契約を破棄し、神の名の下に救われん事を……」

「――っ！」

まるで、悪魔と通じていると、人々に公表しているも同義の宣言だ。

クラウゼアはギリリっと、意志を堅くする。

（そもそもなぜ、悪魔と通じているなどと…っ！）

クラウゼアを貶めて得をする人物なんて、居るのだろうか。

考えられる可能性と言えば、交際を断り続けているグルーク王子だ。

しかしそれだけで、ここまでするだろうか。

これから起こる事態に、緊張と恐怖で鼓動が早くなる。東洋風のビスチェに護られた双つの巨乳が、鼓動に合わせてプルっプルっと小さく弾む。

丸い乳肌や大きな丸尻、艶々の腿には、緊張による微細な汗が纏われていた。

魔女の衣装にゾっとする、一部の中年男たち。

緊張する魔女をチラと涼しく見やると、司祭は高らかに開廷の宣言をした。

「これより、テリィボルの名において、魔女クラウゼアに対する悪魔審問を開始する！」

広場を埋め尽くす人々に、どよめきが広がった。

首輪に繋がれて直立のまま、壇上の魔女はアゴを取られて、轡を外される。

あらすじ　周辺国からの侵略を阻止し、ひっそりと暮らす魔女クラウゼア。人々からは聖女として畏敬の念を寄せられるほどだったが、勤仕する王子の妄執にさらされ、あらぬ疑いのもとに捕われの身となってしまう。

「ぷは、はぁ……」
ホゥっと息を吐くと、司祭から審問のルールが言い渡された。
「魔女クラウゼアよ。全ての質問には、イエスかノーで答えなさい」
審問の席では、司祭は絶対権力者でもある。下手に逆らわない方が良いだろう。
「イ、イエス」
怪訝に見上げる魔女の返答を受け取ると、司祭は質問を開始する。
「そなたは悪魔と通じましたね？」
「ノ、ノーです！」
公開審問で、いきなり決めつける様な問いだ。つい強く否定してしまった。
人々が少しホッとする中、次の質問が、あるアイテムと一緒に投げかけられる。
「このペンダントに見覚えは？」
目の前に下げられたそれは、母の形見のペンダントだった。
どうやらクラウゼアが拘束された時、家捜しをされていたらしい。
「そ、それは母のペンダントっ！　なぜここに⁉」
「これは、この一週間ほどの間に起こったある事件の、現場に残されていたペンダントです」
「！　ある事件……？」
突然のキーワードを、当然ながらクラウゼアは理解できない。町で起こっていた事件など、森に住む魔女が知る由も無いのだ。
ギー司祭の質問が、ざわついた一部の中年男たちに向けられる。
クラウゼアの衣装を見てゾっとしたこの男たちは、魔女によるレイプの被害者たちの中で、意識を取り戻した者たちだ。
「被害者の皆さん。あなた方を苦しめた魔女は、このペンダントを身に着けていませんでしたか？」
「え、ええと……」
堂々とした司祭の威光にたじろいたのか、未だ身体がフラフラする中年男たちは、曖昧な記憶を辿ろうとする。
「そ、そんなペンダントは……」
「魔女は、様々な装飾品を身に着けていた事でしょう。ようく、ようく、思い出して下さい」
強く問い詰められると、曖昧な記憶に自信なんか持てない。
そんな被害者の中で、一際元気な痩せた男が、大声で告げる。
「い、言われてみればっ！　確かにそんなペンダントも着けていましたっ！」
「やはり。これではっきりしました。皆さんを苦しめた魔女は、このクラウゼアだったのです！」
「なっ――っ⁉」
司祭と痩せた男。二人のやりとりだけで、事実だと確定されてしまった。
身に覚えの無いどころか、何があったのかさえ知らない犯罪の、犯人にされてしまったのだ。
「い、一体何の事ですか？　この町で何があったのですか？」
強く問う魔女に、司祭は穏やかに、魔女による男性たちへのレイプ事件と、被害者男性たちの衰弱状態を話す。
「そ、そんな事が……」
拘束されたビスチェの魔女は、初めて聞いたそんな事件に心を痛める。
命をギリギリまで吸い上げるなんて、本当に悪魔の所行だ。
驚愕する魔女の姿に、しかし人々は疑念を持ち始めていた。
「そんな、まさかあの犯人って……」
「だってあのペンダント、クラウゼア様のモノだって……」
ザワつく広場に、新たな証言者が参上する。
「こ、この殺人魔女めっ！」
声の主は、全身に包帯を巻いた兵士たちだった。
「第二中隊への支援に向かった我々を、火炎の魔法で焼き殺そうとした魔女めっ！」
強い言葉で事実を責められて、思考が混乱。つい息を呑んでしまう。
そもそも、クラウゼアが攻撃した部隊は全滅している。生存者がいる筈も無いのだ。
「あ、あなたたちはっ――うぅ…！」
なぜ生きているのですか。という言葉を呑み込む。
今そんな質問をしたら、どのように思われてしまうか――。
そんな心の隙を見逃さず、司祭は質問してきた。
「攻撃したのは事実ですか？」
「イ、イエスっ――しかしそれはっ――」
「みなさまっ、今の返答を聞きましたかっ？　魔女クラウゼアはっ、我らの兵士たちを魔法で苦しめたと、自白いたしましたっ！」
常に穏やかなギー司祭が、力強い怒りの声で宣言をする。
遠くまで通るような声に、クラウゼアもビクっと身を縮めてしまった。
そして人々も。
「そんな……クラウゼア様が……」
「私たちを、裏切ったなんて……」
悲しみの嗚咽が、広場を包み込んでゆく。
「ち、違いますっ――私は…っ！」
レイプ現場のペンダントと、兵士たちへの攻撃。
人々に事実として認識されてしまうと、魔女のどんな弁解も、ただの言い逃れのようにすら聞こえてしまう。

著者近況　猫が人間を誘うときは、チラチラと後ろを見ながら歩きます。先日も、そうやって猫に連れられ呼ばれた先は、エサのお皿でもトイレの掃除でもなく、暖房機の前でした。猫もエアコン関係を理解しているようです。

焦りで肢体が揺すられると、爆乳が跳ねて、艶々の肌に冷や汗が流れる。

困惑するクラウゼアを余所に、ギー司祭が高らかに宣言をする。

「皆さん。我々は魔女クラウゼアから、悪魔を引き剥がさなければなりません。それがクラウゼアの為。我々の為。皆様の為！」

司祭の言葉が、人々の不安を包み込み、収めてゆく。

そして、悪魔を引き剥がす儀式が始められた。

両手の拘束を解かれると、間髪入れずに腕を左右へと引かれ、鎖を使ってYの形で拘束台に繋ぎ直される。

そんな一瞬の動きでも、人々が抱く無意識の不安を利用して、ギー司祭は高らかに告げた。

「魔女は今、悪魔の力を封じる我らが神の首輪を以て、その魔力を封じられています。両手が自由になろうとも、ただ無力であります」

確かに現在、魔法が使えない。

しかしそれは首輪の力などではなく、忍者イヌワシの術によって、気を乱されているからだ。

「ああ…っ！」

しかしそんな事実も、今の人々には通じないだろう。

両手と同じく、両脚が左右に引かれて拘束台に鎖で繋がれると、ビスチェの女体はXの形で晒される姿となった。

日が沈み暗くなってきた広場はしかし、人々が家路につく様子など無い。

壇上を照らすように松明が焚かれて、魔女の姿が闇に映し出された。

「「おお……っ！」」

起伏に恵まれた女体が、両手両脚を開かされる恰好で拘束されている。

愛らしい美顔は困惑と疲弊に彩られていて、首には黒皮の首輪まで巻かれている。

恐ろしい魔力を誇る魔女が、力で押さえ込まれているその姿は、何とも被虐的だ。

苦悶するクラウゼアの傍らに立ったギー司祭は、ボウル大のカップを手にして、静かに尋ねる。

「クラウゼアよ、尋ねます。テリィボルの名において、正直に答えなさい。偽りの言葉には、この聖水を以て、罰を与える事になりましょう」

聖水が罰となる。という事は、悪魔と契っている信仰者だという事。

近づかれると聖水から、知識としては知らないのに生理的に知っているような、異性の匂いがした。

「悪魔と契りを結びましたね？」

「ノ、ノーです…っ！」

強い意志で事実を告げる。視線を交わらせると、クラウゼアはギョっとさせられた。

「！　――つギ、ギー司祭…っ！」

その穏やかな目は、冷静な狂気に彩られていた。

まるで、事実を知っていながら容疑者を陥れている、冷静で異常者の目の光。

「あ、あなたはっ――んうっ！」

透明な液体に満たされたカップを鼻先に近づけられると、余りの腐臭に美顔が曇る。

聖水、と聞かされている民衆は、顔を背けた魔女に対して、懸念を深めた。

「ク、クラウゼア様……」

「聖水から、顔を背けたぞ」

体験も知識も無くても、女体の本能が推理する。

この匂いは、男性の精液。

「透明で、この匂い……これは…っ！」

司祭の持つ液体は聖水などではなく、軍隊などが使用する拷問用の液体。

名前を「淫女の媚薬」といい、捕らえた敵の女兵士を下衆な目的で堕とす際に使用される、魔法調合薬だ。

薬草を煮出して作る媚薬で、ほんの一口でも飲まされてしまうと、男性の精液を高濃度の養分として吸収する、淫らな肉体にされてしまう。

しかも中毒性もあり、犯され続けると、女体は精液無しではいられない淫女へと確実に堕とされてしまう、危険な薬品だ。

表向きは、各国が使用を禁止しているものの、そんな協定を護る国など、この大陸には存在しない。

「な、なぜ司祭様が、このような薬品を……」

通常は、五倍ほどに薄めて使用する。

しかし匂いから察するに、目の前の媚薬は原液を更に濃縮された、特別に濃い薬液。

こんな薬を飲まされてしまったら――。

そして精液を呑まされてしまったら――。

焦燥するクラウゼア。

「虚偽の返答をした罪人よ。テリィボルの名において、聖水による罰を与えます」

小さな美顔の細い顎が、司祭の太い指で押さえられて、唇を開かれた。

「ぁうぅっ――な、なにほ…っ！」

開かれた唇に、精液臭い液体が近づけられる。

特濃原液の匂いだけで、処女の女体は一方的に、性感に目覚めさせられてきた。

鼻腔を擽られると、全身がカァっと熱を上げる。

心臓がトクトクと高鳴って、白い肌が汗を纏う。

「そんな……ひゃくひんん…っ！」

バストが跳ねて、衣装の中では先端の媚突が硬化を始める。

清楚な割れ目がキュウ…と蠢き、後孔はまるで身を守るかのように窄まった。

そんな強い威力ある媚薬が、唇に触れるほど近づけられる。

著者近刊　『星騎士少女キラジェム・ナイツ 悪夢の十三日姦』『猟辱島 スレイブハンティング』『わたしがゼッタイ妊娠するもんっ！ 幼なじみの正妻戦争』『道場破りガールズ!! 負けたら子作りいたしますっ！』『双子づくり！』ほか　好評発売中！

白い喉が晒されると、ホンノリと上気して、周囲の男性たちの劣情を誘っていた。
そして。
「悪魔と契りが無ければ、癒しとなります。首輪の力により、これを拒絶する事は叶いません。聖水を以て、その身体に取り憑いた悪魔を追い払わん」
司祭の祝福と共に、特濃媚薬が口内へと、流し込まれた。
「い、いやっ――んくううぅぅっ！」
閉じられない唇ながらも、必死に喉を閉じて、液体の流入に抵抗するクラウゼア。
（こ、こんなものを飲まされてっ――ええっ⁉）
唇から溢れるかと思われた液体を、魔女の喉は無抵抗にコクコクと、むしろ自ら欲するように、呑み込んでいた。
「んくっんくっんくうぅっ――っ！」
どうして。
と頭が混乱しながらも、数瞬で理解する。
忍者イヌワシに施された、万物呑ませの術。
口に入る物は液体固体気体を問わず、全てを胃の腑へと収める、拷問用の忍術。
完璧に作用している忍の術に、クラウゼアが抗える筈も無かったのだ。
希釈して使用する淫液体が、特濃となって肉体へと、次々と呑み込まされてゆく。
「んくっ、んくっ、んくっ――っ！」
白い喉が溜飲で蠢く。
拘束された美女が液体を飲まされている姿に、周囲の人々は静かで被虐的な興奮を覚え始めていた。
「んくっ、んくっ――ぷはっ――っはあああぁぁぁぁあああ……っ！」
ボウル一杯の特濃媚薬を飲まされると、女体は激しい性興奮に襲われた。
胃の奥から強い性熱が発せられて、血液に乗って全身の隅々へと伝わってゆく。
心臓の鼓動がドクドクと早まって、胃から子宮へと、強烈な飢餓感が湧き起こされてゆく。
処女のクラウゼアにとって、こんな感覚、自慰ですら得た事が無い。
息が乱れて唇が潤み、拒絶の意志も、湿った吐息で蕩かされてしまう。
手足も腰も脱力をして、磔台に×字型でぶら下げられたような体勢。
全身の肌が熱で上気し、微細な汗でシットリと覆われていった。
「はぁ、はあぁっ……こ、こんなぁ…っ！」
手足の先が小さく震え、目の前の景色がクラクラと廻る。
爆乳の先端がキュ…と硬化をして、擦れる衣服で心臓まで、小さな甘電で貫かれてしまっていた。
「か、身体がはっ――ぁ熱ひいぃぃ…っ！」
つい口走ってしまったら、人々の疑念は確信へと代わり始める。
「そんな、聖水なのに……」
「身悶えしてるぜ。やっぱり…っ！」
その姿は、聖水に悶える変態的な悪魔信者にしか見えなかった。
強い飢餓感で子宮が責められ、しなやかな女体が大きく反れて、闇の衣装に隠された爆乳が突き出される。
処女の本能で閉じようとする膝も、力弱くカクカクと震えていた。
頬を染めて性熱と戦う魔女に、司祭が問う。
「クラウゼアよ。悪魔との契りを解消する為には、まずは己の罪を素直に認める事です。悪魔と契りを結びましたね？」
「しひっ――知りまっ――ああああっ――知りませんんんんんっ！」
淫熱に湿った拒絶の言葉が、自らの胃と子宮で響いて、女体を責める。
しかし人々は。
「あんな悶え方して、何が知りませんだよ！」
「クラウゼア様……やっぱり悪魔と…っ！」
磔にされているのは、もはや容疑者などではなく、聖水に悶絶する悪魔信者でしかなかった。
クラウゼアを背後から見守る宰相は、ギラついた目を更にギラ付かせて、密かに笑う。
クラウゼアの女を求める王子も、汗を纏って震える被虐的なヒップに、強く興奮している。
ギー司祭は、予想通りの答えに静かな満足感を得つつ、更なる辱めへと、冷静に事を進める。
「では更なる聖水を、これへ」
大きなカップに再び媚薬が用意されると、今度は魔女の肢体に、チロチロとかけ始めた。
「な、何を……はあああぁぁ…っ！」
漆黒のビスチェに、偽りの聖水が染みこまされてゆく。
上気する白い肌を液体が伝い、爆乳の山や谷間を濡らし、細いウエストを伝い、広い女腰やムッチリの腿を流れて濡らす。
魔女の全身が媚薬に濡れると、テリィボルの装束に身を包んだグルークが、背後に位置する。
「クラウゼア、この日をどれほど待ち望んだか！」
ニヤニヤとイヤらしい笑みを浮かべながら、王子は魔女の背後から、濡れた衣装の両爆乳をムニュっと鷲掴みにしてきた。
「きゃあぁっ、何をっ――いやあああああっ！」
初めて、異性に胸を触られた――。
処女の魔女は、激しく動揺する。
しかも乱暴に掴まれただけなのに、乳房全体が一瞬で、強い性熱に炙られてしまったのだ。
「こ、こんなああぁぁっ！」

ドクンっドクンっドクンっ！

異性の指の強さと堅さを体験させられて、清楚な意識が、汚辱感に踏みにじられる。

同時に、双乳から自発的に湧き起こされる強い性熱と甘い痺れに、心臓から背筋を貫かれてしまう。

脊髄から脳と下半身へと、一方的で侵略的な、男性の存在感が教え込まれてゆく。

自分の身体が、望まない異性によって性に目覚めさせられて、男性を教えられてゆくのが、解ってしまうのだ。

「こ、こんな事ほっ――ああっ――いやですううううっ！」

このままでは、乙女の身体も意識も全て、グルーク王子の肉として、躾けられてしまうだろう。

それは、ただの恐怖でしかない。

そんなクラウゼアの意志など、好色王子は完全に無視。

司祭が頷いて了解を示すと、魔女の女体は好色王子の手によって、強くまさぐられ始めた。

左右から若くて大きな掌で、隠された爆乳を揉み上げられる。

――むニゆりュり、たプりュもミゅたプる。

「っいやはああっ――いやですふううっ――ぁはあっ――むへっ、ゃめへっ、くらさいいいいっ！」

「ふひひひひ、流石はクラウゼアだなぁ。想像以上の揉み心地だぞぉ！」

全ては、媚薬を女体の肌に浸透させる為だ。

「おっ、おやめくださっ――ひいいいっ！」

尊敬の「そ」の字も無い人物に胸を触られると、背筋から全身までもが、ゾっとおぞけ立った。

なのに、乳房の神経は甘くて深い性感にトロけ、胸から上半身、下半身、更に手足の先にまで、震えるような性の融解感を伝えてくる。

「はあぁぁぁあっ――や、やめて…くださひいいっ…っ！」

魔女の哀願は、逆に王子を、勝利者の気分に浸らせてしまう。

「これはぁっ、悪魔と通じたお前をっ、正しい道へと戻してあげる為なんだぞぉ！　クラウゼアあぁっ、ふひひひひっ！」

更に乳房を強く愛撫しながら、人々に聞こえるように、わざと大きな声で告げるグルーク王子だ。

媚薬を纏わされた双乳が、指先を食い込まされてタップリと捏ねられる。

衣服ごと、根元から先端に向かって絞られると、まるで性神経を直接愛撫されたかのような、強い性刺激で爆乳が覆われてしまう。

それに、いつも一人で時を過ごすクラウゼアには、予想すらできなかった感覚。

（ひ、人々の前でっ――こんなはっ――っ！）

肉体を好き勝手にされる事が、こんなにも恥ずかしい。

性の対象としか見られていない恥ずかしさと、そんな現状に抗えない自分に対する恥ずかしさ。

しかも身体は嫌悪するどころか、一方的な肌陵辱に、性感すら感じているのだ。

まるで、男のオモチャにされる事を喜んでいる恥女のようだと、人々に思われている気さえする。

羞恥で混乱して、抵抗の言葉が止まらない。

エモノを手に入れた王子の指で、衣服の上から媚突をキュっと摘み上げられる。

「お、王子ひっ――どぅか、ぉやめへぇぇぇぇぇぇぇっ――っ！」

その瞬間、乳首から心臓から脳裏までもが、切なく強い性感で、ピリっと貫かれた。

その悲鳴はもう、愛撫を喜ぶ淫女の吐息、そのものだ。

「クラウゼアよっ、お前は清めの聖水にすら、悶えるのかあっ！」

魔女の身体を背後から責め放題なグルークは、卑劣な狩猟者のように、淫欲まみれな目を輝かせる。

欲求のままにクラウゼアを弄ぶ王子に、宰相のガギロギアは、静かに眼光をギラ付かせていた。

乳房愛撫を楽しむ王子は、エモノの女を更に羞恥へと追い込んでくる。

「お前のオッパイは、どれほど綺麗なんだろうな⁉」

興奮の鼻息と共に投げられた疑問に、魔女は一瞬だけ「えっ⁉」とさせられる。

「見てやるぞぉっ！　そうらっ！」

次の瞬間、魔女衣装の胸部が左右とも、ガバっとズリ下げられてしまった。

町の人々の目の前で、クラウゼアの爆乳が左右とも、完全に晒されてしまう。

双乳を晒されても現実が認識できず、一瞬だけ遅れて、クラウゼアは羞恥に絶叫した。

「っ――っ！　いやあああああっ！」

生まれて初めて、大勢の人々に乳房を見られてしまう。

自分を敗北させた忍者イヌワシに見られた時とは、状況も人数も全く違う。

クラウゼアの爆乳は、大きく実って形も丸く、白い肌は艶々で柔らか。

先端の乳首はツンと上を向いていて、清楚な桃色に色付いていた。

集まった人々も、美しい魔女の見事に淫美な処女爆乳に、視線を引かれている。

「すげえぞ、なんてデカいおっぱいなんだ…っ！」

「本当……それに、すごく綺麗……」

「み……見ないでへっ――ああ…っ！」

人々の視線が、乳肌と乳首に突き刺さってくる。

晒される恥ずかしさで意識が追い詰められて、今

すぐにでも壇上から逃げ出したい。
なのに肉体は×字に拘束をされて、逃げるどころか、隠す事すらままならないのだ。
剥き出しの爆乳を、王子の掌で直揉みされる。
「大きなおっぱいだなぁ、うへへへへっ！」
――たプにュもミむニゅる、もミゅるュたプもミもミゅモみるュ。
温かい乳房に指を食い込まされると、衣服越しとは比較にならない程、強くて鋭い性感で、女体が貫かれてしまう。
「っひいいいいぃぃっ――ぃやっ――やはあああああぁぁぁぁああっ！」
過敏な乳肌は、男の指のザラザラ感だけでなく、サラサラした指紋の起伏まで、拾ってしまう。
男の掌で直接触れられている――。
そんな実体感に、清潔な意識も自尊心も、激しく嫌悪している。なのに女体は、本能的で一方的な服従感を目覚めさせられて、自覚させられてゆく。
意識は、今すぐにでも掌を離して欲しいのに、乳房は汚らわしい王子の掌を甘受して、自ら愛撫を求めてしまう。
初めて体験する異性の掌に、年頃の女体が、無条件の歓喜に震えてしまうのだ。
運命の男性以外とは決して性交を持たない魔女。
絶対に知りようも無い筈の異性との触れ合いを、こんな辱めで教えられてゆく。
「む、胸へぇっ――はあああっ――そんなにひっ、ゃめてっ、くださひぃぃぃっ――っ！」
意識の抵抗に比して、肉体は力を奪われて、細い背中を王子の胸に預けてしまっている。
抵抗の吐息はシットリと湿り、抱き寄せられるままに、男の愛撫を受け入れていた。
エモノの様子に、狩猟本能が満たされてゆく好色王子。
「恥ずかしいのか？　でもお前に拒まれ続けた僕は、もっと恥ずかしかったんだぞぉっ！」
興奮のせいか元からなのか、もはや理屈ですら無い逆恨みの言葉を口にするグルーク。
片手で爆乳を揉み遊びながら、もう一方の手が、純白のショーツに伸ばされた。
白い生地の前面を指撫でされると、偽聖水が染みこんだショーツには乙女の割れ目が薄く浮き立つ。
タップリの女腰を撫でられて、ショーツの紐を摘まれた。
「ひぃぃっ――っな、何をおぉっ⁉」
下着の上からの割れ目愛撫だけではなく、更に辱められる予感。
追い詰められる魔女に、グルーク王子は嬉しそうに好色に、ニヤりと笑う。
「今度はここだ！　みんなに晒してやるぞぉっ！」
片方の紐がスルりとズリ下げられて、白い下腹部が剥き出しにされてゆく。
「やっ――やめてへっ――ぁはあああっ――ゃめて下さいぃぃっ！」
乳房愛撫で性感を燃やされながら、秘処公開という恥辱に震えるクラウゼア。
神秘なる魔女の最も神秘なる箇所が晒される期待感に、広場の人々は強い興奮の視線を集中させる。
引き締まった下腹部が露わにされて、スベスベの恥丘が剥き出しにされた。
「ま、魔女のマンコ……っ！」
「ゴクリ……」
引っ張られるショーツは、もう耐久の限界。
ギリギリまで脱がされると、もう隠されているのは、肉の閉じ目だけ。
そして。
「クラウゼアのマンコ、見せてやるぞぉっ！」
「いっ、いやですぅっ――いやあああっ！」
――っビリリイィっ！
王子の力で、遂に極薄いショーツが引き裂かれてしまった。
隠し護る薄生地を奪われた魔女の穢れ無き女性器が、松明の明かりに照らされて、人々に晒されてしまう。
×字型に拘束されて閉じられない腿の付け根に、男女全ての視線が集中されていた。
「「うおおぉぉっ！」」
広い大人の女腰に対して、ぴたりと閉じられた幼女のような、クラウゼアの割れ目。
恥毛どころか産毛すら無く、艶々の柔肉は朱く色付いて、無垢な幼女のそれだった。
更に背後からの手によって、閉じられた秘肉が左右にクチュリ…と広げられる。
「ひぃぃっ――っ！」
粘膜まで公開されてしまうと、乙女のクラウゼアはもう、美顔を背けて身を固くする事しかできなかった。
晒された姫処は、媚薬の効果で濃い桃色に息づいていて、清楚な濡れ艶も魅せている。
割れ目肉の上端では、小さな肉芽が包皮から、濡れた半身を覗かせていた。
衆目に震えるクリトリスから続く花弁は、薄くて小さくて左右も綺麗に整っている。
柔らかい粘膜は薄くて小さなシワをいくつも刻んで、処女の清潔さと女肉の柔らかさを確信させた。
針で突いたような尿口はプクンと膨らみ、すぐ近くの割れ目下端では、未だ男性を知らない処女の膣孔が男たちの視線に怯えている。
ツルツルの会陰を過ぎると、薄いカフェオレ色の後孔が、膣孔と一緒に震えて収縮。
開かれた姫粘膜は、媚薬と愛撫と視線の相乗効果で、処女の恥蜜を薄く纏ってもいた。

ひぎぃぃ！おっ おがぁざまぁっ！
止めろ…ぉ 止めろぉぉっ！
よーし 次は赤だ
俺は黒でいくぜ
くくっ どうやら親の総取りだな
ではチップは回収するぞ
あぁ～ マジかよ～！
そうわめくなお前たちが楽しめるようにしてやる
んぎぃ――!!
おがァアアア!!
親の総取りの代わりに二人同時に電撃だ
まだまだ続く電撃アクメ！
監獄戦艦3
熱砂の洗脳航路
PRISON BATTLE SHIP 3
BRAINWASHING ROUTE OF BOILING SAND
episode 08 洗脳完了
漫画 COMIC 楠木りん
原作 ORIGINAL Anime LiLiTH

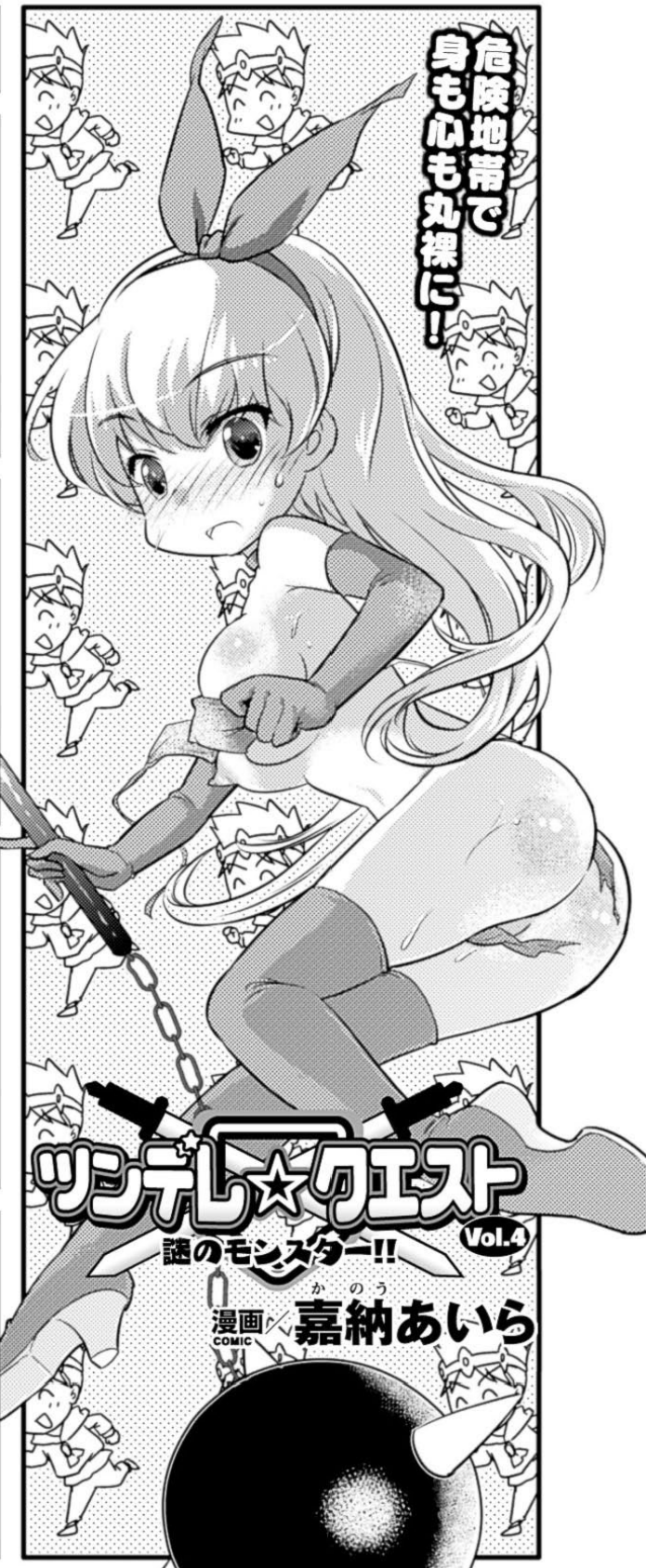
ひぎっ！ぢっ乳首燃えりゅ！
ビリ
ひゃはは！最高です艦長！
んおおッ！腹があッあぁあぁ!!
んぼぉほぉ!!
そら！もっと気持ち良くしてやるぞ！思う存分イケ！メス豚母娘が！
や…やめ…っ！
おがぁあっ
ビクンビクン
ブシャアァ
うひひ！電撃でイっちゃったみたいだな！
あっ…
ジョロロロ
提督のお漏らし止まらないみたいだぜ!?
おオォ…っ
ビクッ ビクッ

あ～あくそ！全部すっちまった！
へへっこっちは儲けさせてもらったぜ！
ひ…ぐうお腹…壊れりゅ…
はぁ…た頼む…もう…糞を…させてくれ…
ブル
ブル
ビッ
ビッ
ビッ

ふぅ…うぅ…わわたひも…糞をさせてくれ…
ききしゃまらの前で…糞をひり出しゃせてくれ…！
よしいいだろう
みんな最後の締めだ
ぐぅ…ややっと…出せりゅ…
はぁ…早く栓を取れ…うぅ
すげぇ格好ですな中尉！
提督も鼻フック似合ってますよギャハハハ！
い…いいから早く糞をさせろォ…
そら！
好きなだけ出せよ！
んほぉ！栓んっ…！
なっなくなったぁ…!?
ビクッ
ブル
ブルブル
プルプル
ビクッ
ヒクッ

んふごぉおお！出だひゃあぁあ！
ビクッ
ビクッ
ビュルル
ビクッ
ビクッ
ブリュウウウー
おぎぃいい！気持ぢいいイッ！
ひゃは♪すげぇ糞の量！流石に引くぜ！
ビクッ
イグラ♪ケツマンコが糞に擦られへイグウラ!!
ビクッ
はひ♥ウンチとまらないい！ぎもぢいい♥
ぎゃはは！どんだけ糞を溜めてたんだよ！
クハハハッ！素晴らしいぞ提督 中尉
ブリュウ
ブリイイイ
ビクッ
ビクッ

修行替わり
う…うう…なんてきついクエストなんだ…っっ
ゼーゼー
ほらーさっさと歩く！
そろそろ歩いてよ！イレーネちゃん！
すっ
荷物
何言ってんのよ！ワタシのおかげでレベルアップしたんじゃないの？
だいたいアンタ…
いつも戦闘時に逃げるし
イレーネちゃん頑張ってエー!!
……


危険地帯で身も心も丸裸に！
ツンデレ☆クエスト
Vol.4
謎のモンスター!!
漫画 COMIC 嘉納あいら

危険地帯レベル10

違和感

イレーネ
勇者のお供をする女戦士。
勇者の幼馴染み。

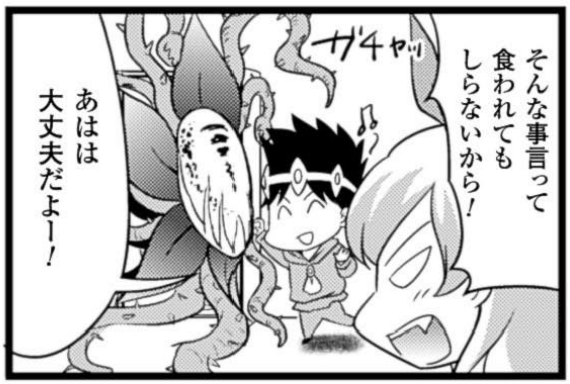
勇者
イレーネに振り回される少年。
あまり役に立たない勇者。

楽天家勇者

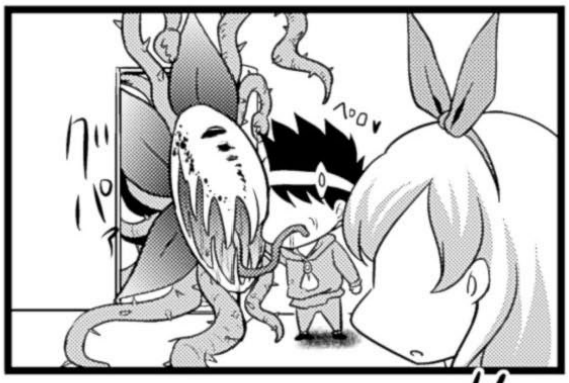
怪しげな館

あんたよくそんなノンキね!?もしかしてこれはワナかもしれないのよ!?
まあまあ…そんなすぐ疑ってばかりじゃあダメだよイレーネちゃん
キーッ

……
はっ


そんな事言って食われてもしらないから!
あはは大丈夫だよー!
ガチャッ

あと少し…!
あと少しだからもう少し待ってね!


ペロペロ

あともう少しでご飯が食べられるから…っっ
ねっ?

ほらやっぱり
っ!!

なんか変だわ……
どーしたの?イレーネちゃん

the magical girl TOMOE

魔法少女巴

第3話 漫画 COMIC ひぐちいさみ

はァ
はァ
はァ
んっ！
ビチ
ビチ
ビチ
ビュルルル
ビュルルル
ビュルルル

チュン
チュン
知子…
お邪魔しました…
カチャ
ペコ
いつもありがとうね巴ちゃん
…もういいの？
……うん
さあ！今日も新違反者の足取りを追うわよ！
トボ
トボ
…うん
……ちょっと
しっかりしなさいよ！
あんたがそんな調子じゃあの子も元に戻れないわよ！
はっ
！
一ヶ月前――
きやあああっ！

いっ嫌ァ！巴助けてぇ！
知子!!
…ちっ
はっ
はぁ！
やめてぇ！
くるっ！入って…
奴ら好き放題ね……
ふぁあっ！ひゃあぁあぁあっ！
そんら…激しいの…ひぃっ！

ドクン
ドクン
ドクン
あぁぁ…あううう～
はァ
はぁ
らにこれぇ～…
ドクン
らにかがぁ…らにかがすいとられるう……
ドクン
ドクン
知子!
ドサッ
ピッ
ったく!
人助けなんてあたしの性分じゃないんだけど…
いやぁっ!!
ひっ!?

魔王の后へと堕ちたセリーヌ……その矛先はかつての親友へと向かう！
麗しの皇女は豊満な肢体を弄ばれ、幼き頃の思い出さえも穢されて、
牝奴隷に堕ちる!?
イセリア英雄戦記
the legend of the Icerya war
第37話 聖魔邂逅
小説 NOVEL／蒼井村正 あおいむらまさ
挿絵 ILLUSTRATION／牡丹 ぼたん

「我が君よ、フェイエンに先行し、勇者王の血を宿せし姫、フィオナを討つ栄誉を、なにとぞ私にッ！」
闇に堕ちた女騎士、セリーヌは、魔王の足元に臣下の礼をとって跪き、懇願した。
（この御方のために武勲を上げたい！役に立ちたい！）
黒い堕天装甲をまとった女騎士は、隷属の悦びに魂を震わせながら、強い光を宿した目で魔王を見詰める。
目の前にたたずむ魔王は、黒いマントに身を包んだ、黒髪、黒瞳、浅黒い肌をした美少年にしか見えない。
しかし、その肉体から放たれる禍々しい魔力と覇気は圧倒的であった。
「……よかろう。勇者王の子を孕んだフィオナ姫を堕とす任務、我が后セリーヌ、お前に任せる」
感情の起伏が感じられぬ声で、魔王は、后となったばかりの堕天騎士に命じる。
「有り難き幸せ！　では、直ちに出立いたします！」
「待て……そう焦るでない」
意気込んで立ち上がったセリーヌを、魔王が静かに制した。
「しかし、ここからフェイエンまでは遠く、道中にも幾多の障害が想定されます」
急いた口調で具申するセリーナ。
「一刻も早く出発せねば、敵に先手を打たれ、我が君に余計なお手間を取らせてしまうやもしれません！」
「遠い……か？」
魔王の口元に冷笑が浮かぶ。
「我が魔力の前では、距離など何の意味もない」
静かに告げた魔王は、まるで少女のように華奢で滑らかな腕を真っ直ぐに差し伸べ、宙を愛撫するかのように指を蠢かせた。
「余計な邪魔に時間を取られず、フィオナ姫とまみえられるよう、我が、お前の進む道を開けてやろう」
バキバキバキッ！　ズゴゴゴゴゴッ……。
先ほど、魔王が顕現した時と同じ音が空気を震わせ、空間が裂けてゆく。
「マジックゲートを、これほどたやすく開くとは……感服いたしました、我が君……」
畏怖さえ感じつつ、頭を垂れるセリーヌ。
「充分な魔力を持たぬ者ならば、どこに飛ばされるかわからぬ亜空の門だが、我が后となるほどの者ならば難なく抜けられよう」
跪いた女騎士を、魔王の黒い瞳が見据える。
魔の頂点に君臨する者とは思えぬ、美しく澄みきった眼差しであった。
（我が主に試されている……期待されているッ！　なんという至福！　なんという名誉！）
漆黒の堕天装甲に包まれたセリーヌの肢体が歓喜にわななく。
きめ細かな白い肌が桜色に上気し、堕天装甲の奥で秘裂が潤む。
（武勲を上げ、その恩賞として、この御方に抱かれたい！　骨の髄まで肉の愉悦に溺れたい！）
つい先ほど口づけした魔王の巨根、そのたくましい硬度と唇を火傷させてしまいそうな熱気を思い出しながら、女騎士は激しく欲情していた。
「行くがいい、我が后にして忠実なる下僕、堕天騎士セリーヌよ！」
「はっ、我が君に勝利を！　牝奴隷に堕としたフィオナ姫を必ずや捧げてご覧に入れます！」
深々と頭を下げたセリーヌは、空間の裂け目へと、躊躇なく身を躍らせた。
セリーヌが単身出撃する数十分前のこと……。
フェイエン領内奥深くにある練兵場に、フィオナはひとり居た。
女性らしい柔らかなラインで構成された肢体を包んでいるのは、神秘的なライムグリーンの光沢を放つ精霊装甲。ドワーフの工匠、ハーボックによって作り直された聖なる甲冑、フィオナが戦うための新たな力だ。
ザワッ！
市街地を模した石壁の陰から、武器を手にした複数の影が飛び出し、四方からフィオナを包囲するかのように向かってくる。
カチャカチャと耳障りな足音を響かせながら近づいてくるモノは、人ではない。
太さの違う数本の丸太をロープで繋ぎあわせただけの、等身大の木偶人形だ。
フェイエンでは「木人」と呼ばれる、魔力によって駆動する戦闘訓練用の自動人形である。
「はあぁぁっ！　サンクチュアル・アロー!!」
高々と飛翔したフィオナは、空中で華麗に身を捻りつつ、周囲から迫ってくる木人に向かって光の矢を連射した。
バシイッ！　バキバキバキンッ！
集束した魔力によって作り出された光の矢は、狙い違わず命中し、迫りくる四体の木人たちを打ち砕いた。
（今倒した四体で、合計二十体。これで全部のはず……全機撃破までに二分……）
精霊装甲姿の姫は、小さな安堵の吐息を漏らしながら、フワリ、と着地する。
ゴバァァッ！
突然、フィオナの足元が盛り上がり、ひときわ大型の木人が地中から姿を現した。
背丈は姫の倍以上、腕も四本ある、異形の木人だ。
「えっ!?　まだ残っていたの!?　くうっ！　サンクチュアル・アローッ！」
奇襲にもひるまず、彼女を捕まえようと伸びてきた巨大木人の腕をかいくぐって懐に潜り込んだフィオナは、ほぼ密着した状態で魔力の矢を放つ。
ズギャァァンッ！

至近距離から矢を受けて四散した木人の頭部には、リーダーのマークである紅い角がつけられており、その顔には「油断大敵、隠しボスだよ♪」という殴り書きの文字が記されていた。
「ふぅ……。この木人を仕込んだのは、きっとジュダね」
フウッ、と大きなため息をついたフィオナは苦笑を浮かべる。
「悪趣味イタズラだけど、そうね、確かに油断大敵だわ。……もう、出てこないわよね？」
周囲を見回していたフィオナは、新たな敵が出てこないのを確認し、ようやく肩の力を抜いた。
「精霊装甲の扱いには、随分慣れてきたけれど、まだまだ修行が必要ね、魔力の使用配分も考えないと……」
フィオナは、額に浮いた汗を拭う。
サンクチュアル・アローを連射し、木人の起動にも、かなりの魔力を使ってしまったため、いささか消耗気味であった。
「サンクチュアル・アローの威力と連射速度は向上したけれど、狙いを定めてから放つまでに、まだ少し時間がかかりすぎているわね。改善すべき点だわ」
冷静に自己分析しつつ、フィオナは汗を流すべく、練兵場に隣接した湯あみ場へと向かう。
「狙って、放つ……。それだけのことなのに、難しいものね。もっと弓の鍛錬を真面目にしておくべきだったわ」
歩を進めながら、精霊装甲をまとい、最前線で戦うことを決意した姫は、もどかしげにつぶやく。
精霊装甲は確かに強力な戦力ではあるが、強大な魔王軍に対抗するには、装着者自身の能力向上が不可欠と判断したフィオナは、連日、深夜まで修練に励んでいるのである。
その甲斐もあって、魔力収束の速度や体捌きは確実に増しているが、それでも、フィオナは焦りを感じてしまうのだ。
「決戦の時は近いわ。わたくしも、もっと、戦う力をつけなければ……」
復活した魔王に率いられた闇の軍勢は、日々勢力を増し、各地を蹂躙していた。
魔族はもちろんのこと、オークやゴブリンなどの亜人、邪教の信者たち、そして、淫辱の責めに屈し、魔王の配下となってしまったかつての仲間たち……。
「戦う力も大切だけれど……敵となってしまった仲間たちと対峙しても心乱さぬ覚悟も必要なのね……」
憂いの吐息を漏らす姫の脳裏を、幾つもの面影がよぎる。
「……セリーヌ、あなたが味方として傍らに居てくれたのなら、どれほど心強いことでしょう」
親友である女騎士の凛々しく頼もしい姿を思い出しながら、フィオナは夜空を見上げ、哀しげにつぶやいた。
フィオナたち反魔王軍は、魔王に与するすべてと向きあい、勝利しなければならないのだ。
それは、フィオナの幼馴染みであり、無二の親友でもある女騎士、セリーヌと戦う可能性が高いことを暗示していた。
「どんな苦難の中にでも、希望はあるわ。そう、小さいけれど、強い、希望の光が、わたくしの中に……」
歩を進めつつ、下腹にそっと手を当てた姫は、慈愛に満ちた微笑みを浮かべる。
「精霊装甲の力を使う度に、あなたの力が増して、力を貸してくれるのを感じるわ……わたくしよりもずっと、頼もしい成長ぶりね」
精霊装甲越しに下腹をそっと摩りながら、彼女の子宮に宿った小さな命に語りかける。
憎き皇帝ギュスターヴに犯され、望まず孕まされた子は、皮肉なことに、イセリアの王族が代々受け継ぐ破邪の力を保持していた。
フィオナのまとった精霊装甲は、彼女自身の魔力のみならず、胎内の子が持つ破邪の力も合わせて引き出すように設計されている。
精霊装甲のコントロールに慣れてきた最近は、胎内から湧き上がる強い破邪の力を、より明確に感じられるようになっていた。
「あなたが生まれてくる世界を、安らぎに満ちたものにするために、あと少しだけ力を貸してね。一緒に頑張りましょう」
数えきれぬ恥辱の試練にも決して心折れなかった気丈な姫は、緩やかにカーブした石段を降りながら、希望の子に優しく、そして力強く囁きかける。
石段を降りきった先は、湯あみ場になっている。
石畳が敷き詰められた広場の真ん中に、ちょっとしたプールほどもある湯溜まりがあり、聖獣を模した湯口から、温かな湯が滔々と流れ落ちて白い湯気のヴェールを周囲に拡げていた。
（今はあれこれ思い悩むよりも、自分にできる精いっぱいのことをするだけね。お風呂に入って、疲れを取りましょう……）
精霊装甲を解除し、着衣をすべて脱ぎ去ったフィオナは、汗ばんだ身体を洗い清めてゆく。
幾多の陵辱を受けてもなお、清純さを失わぬ美裸身を、温かな湯が舐めるように流れ落ち、汗とともに疲労をも洗い流してくれた。
バキッ！　バキバキバキンッ！
湯あみ場から少し離れた森の奥で、耳障りな音を立てて空間が裂け、黒々としたゲートが口を開いた。
「我が君よ、無事、ゲートを抜けましたぞ！」
空間の裂け目を抜けて姿を現したセリーヌの髪を、木立の間を吹き抜けてゆく夜風が揺らす。
「厳戒態勢にあるフェイエン武踏会の

著者近況　すっごく久し振りに陵辱シーン書きました。いやー、楽しかった♪　今後もどんどん書いていきたいですね。

領内に、これほどたやすく侵入できようとは、さすがは我が主の魔法だな」
魔王の后となった堕天騎士の口元に、誇らしげな笑みが浮かぶ。
「さて……フィオナはどこかな？」
目を細め、わずかに顔を上向かせたセリーヌは、胎内で渦巻く魔王の力に呼応する英雄王の波動を探る。
「感じるぞ……フィオナの気配、……これは、近いな。フフッ」
淫蕩な笑みを浮かべた女騎士は、気配を殺しながら忍び寄ってゆく。
（私は魔王の后となったのだ。この世界を我が主のものとするために、私は今こそ過去の宿縁をすべて断ち切る！覚悟しろ、フィオナ！）
邪悪な決意を胸に歩を進めてゆくセリーヌの脳裏に、親友である姫の姿が走馬燈のように浮かぶ。
朗らかな笑みを浮かべ、子供のように菓子を頬ばるフィオナ。
恥じらいに頬を染め、救いを求めるかのように見詰めてくる白い美貌。
そして、喜悦に泣き悶え、長く尾を引く絶頂の叫びをあげながら上り詰めてゆく痴態……。
「くふうぅぅんっ！　フィオナ……犯してやりたいっ！　私の手で、堕としたいッ！」
ズキュンッ！　と音が聞こえてきそうな勢いで、セリーヌのヴァギナが収縮し、激しい欲情の炎が全身を火照り疼かせる。
「待っていろフィオナ！　全身全霊でお前を快楽責めにして、堕としてやるぞ！」
友情を歪んだ淫欲に変換された堕天騎士は、湯あみ場へとたどり着く。
（居た！　あの後ろ姿、間違いなくフィオナだ！）
大きな湯船の縁にしゃがみ込み、髪を洗っている女性の後ろ姿を湯気越しに発見したセリーヌは、獲物を見つけた肉食獣のように舌なめずりする。
湯気のヴェールをかけられて幻想的なエロチックさを増した姫の裸身は、灯籠に照らされて、白々と浮き上がっている。
（その白く柔らかな肉体、存分に辱め、肉悦に堕として我が君への供物にしてやるぞ！）
瞳を爛々と輝かせ、セリーヌは無防備に身体を洗うフィオナの背後へと忍び寄ってゆく。
（さて、どう料理してやろうか？　まずは捕らえて、あのたわわな乳房と尻を嬲り抜いて……）
ジワジワと距離を詰めながら、セリーヌは幾つもの責めの手管を脳裏に思い浮かべている。
漆黒のアーマーをまとった女騎士は、倒錯した欲情をさらに激しく燃え上がらせていた。
「フィオナ、相変わらず色っぽい尻をしているじゃないか！」
充分に近づいたセリーヌは、無警戒に湯あみしているフィオナに呼びかける。
「ひゃんッ！」
後ろからいきなり声をかけられたフィオナの裸身が、ビクンッ！　と跳ね上がった。
「その声は……まさか、セリーヌ!?　なぜ、こんなところにッ!?」
驚愕しながらも、咄嗟に身を翻したフィオナは脱衣籠の脇に置かれた精霊装甲に向かって裸身を躍らせる。
「させるかッ！」
セリーヌの右手が、目にも止まらぬ速度で振られた。
ズガッ！
黒い刀身の半ばまで石畳に食い込ませ、フィオナの進路を断ったのは、セリーヌの愛刀である魔剣クラウソラス。
「瘴気結界、展開ッ！」
轟ッ！
刀身から噴き出た黒い瘴気が壁となってフィオナとセリーヌを包み込み、精霊装甲と分断する。
「ああっ！」
「そおら、捕まえたッ！　しばらく見ないうちに、お前の乳は、また大きくなったんじゃないか？」
無念そうな呻きを漏らすフィオナを背後から羽交い締めにしたセリーヌは、たわわな乳房を鷲掴みにして動きを封じた。
「くあぁぅッ！　いっ、痛いッ！」
黒いアーマーに包まれた指を、乳肉にギチギチと容赦なく食い込まされた姫は、白くたおやかな裸身を捩らせて苦悶の声をあげる。
「精霊装甲を着たお前と正々堂々戦い、力ずくでねじ伏せてやってもよかったが、勢い余って殺してしまっては、元も子もないからな」
量感たっぷりな果肉に指を食い込ませて荒っぽくこね回しながら、セリーヌは熱い吐息混じりに囁きかける。
「だから、快楽責めにして堕としてやる。覚悟しろ。クククッ」
「くぁ、あぅぅっ、お願い、正気に戻って！　今のあなたは魔王の力で操られているだけ……そうなのでしょう？」
「お前ならそういう戯れ言を口走ると思った。実に浅はかで、短絡的な思い込みだな、フィオナよ」
必死に顔を捩り、悲痛な声で呼びかける姫に、魔に堕ちた女騎士は冷笑で応えた。
「操られてなどいない。私は我が君に心酔し、自らの意思で后となることを決めたのだ」
「魔王の后に、ですって!?」
フィオナの顔が、ギクリ！　と強ばる。
「そうだ。お前もじきに、我が君の所有物になる。この身体も、心も、親友である私が直々に嬲り尽くして牝奴隷に堕としてやろう！」
セリーヌは、邪悪で淫蕩な笑みを浮かべ、片手に余るサイズの乳房を鷲掴みにして責め立てた。
ぎゅむっ、むぎゅるっ、ぎちっ、ぎしっ、ぐりゅんっ！

著者近刊　『ウィッチ&エッチ　クールな魔女をマゾ調教してみた』『対魔忍ユキカゼ 対魔忍魔調教に堕つ』『呪詛喰らい師1～3』『超昂閃忍ハルカ　スバル虜囚魔辱編』『もののふガールズ1～2』
好評発売中！

「くはぁぅ、やっ、やめ……やめてッ！　セリーヌッ、つぁぁ、んくうぅぅんっ！」
黒い指先が白い果肉を縦横無尽に揉み嬲り、フィオナの顔を苦悶と辱悦に歪ませる。
「おやおやフィオナ、抗いながらも、乳首をこんなに硬くして……クククッ、お前の身体は、すっかり犯され癖がついてしまったようだな」
漆黒の堕天装甲に包まれた指が、鮮やかなピンク色に充血してしこり勃った乳首を摘んでクリクリと揉み転がす。
指の間で引き延ばされた乳頭は、さらに硬度を増し、乳輪ともども鈍痛を感じるほどに充血していた。
「ほら、どんどん硬くなる。まるで小さなチンポみたいにいやらしい乳首だな」
ぎゅりっ……ぎゅむるるっ！
サディスティックな笑みを浮かべた女騎士の指が、痛々しく尖り勃った乳首を容赦なく捻り上げる。
「くぅぅんっ！　セリーヌっ、こんなこと……やぁぁんっ、乳首、ねじ切れちゃうッ！」
「案ずるな、ねじ切れる寸前でやめてやる。フフッ、痛いのも感じるようだな。発情臭が濃くなってきたぞ」
ギチギチと捻り上げられた乳首が血の気を失って白っぽく変色するまで責め立てながら、セリーヌはフィオナのうなじに鼻先を押し当て、ほのかに立ちのぼり始めた甘い淫臭を嗅ぐ。
「そろそろ限界まで捻れたかな？　そおら、こういうのはどうだ？」
ぬぎゅっ……ぎゅむむっ！
限界勃起状態の乳首が、サディスティックな指先に押し込まれ、乳肉の奥に深々と埋没する。
「そんな……発情なんて……あぁぁんっ！　乳首っ、奥ッ、そんなに奥まで押し込まないでぇぇ！」
否定しようとするフィオナの声も、勃起乳頭の基部が肋骨に擦れるまで押し込まれてグリグリと嬲り転がされると、甘く裏返った嬌声に変換されてしまう。
「乳責めだけでいい声を出すじゃないか。そおら、もっと淫らな声をあげさせてやるぞ！」
サディスティックな衝動を抑えきれなくなったセリーヌは、フィオナの腿の狭間に、背後から膝頭をねじ込み、乳責めに悶える姫の裸身を、グイッ！と持ち上げた。
「ふわぁぁぁんっ！　やぁぁっ、壊れ……ちゃうっ！」
鷲掴みにされた豊乳と、膝に突き上げられた股間だけで全体重を支えた状態となった姫は、甘く裏返った悲鳴をあげ、爪先立ちになった美裸身を震わせる。
湯滴をきらめかせる白い素肌に、苦悶の汗粒がドッ！　と噴き出し、全身の筋肉が緊張と弛緩を繰り返す。
「オマンコが熱くなってヒクヒク動いているのが、私の膝にも伝わってくるぞ。そおら、もっと鳴け！」
嗜虐の声をあげた堕天騎士は、実戦で鍛え上げた大腿筋を躍動させ、膝頭に跨がったフィオナの身体を上下に揺さぶって責め立てた。
全体重を受け止めた秘部がひしゃげ、恥骨がギシギシと軋み音をあげるのが聞こえてくるような、ハードな膝ロデオだ。
「んぁっ！　あっアッあんッ！　ふわぁ！　いっ、痛いッ！　セリーヌッ、痛いから、やめてぇぇぇ！」
「犯され慣れしているお前のことだ、痛いのも、じきに気持ちよくなるんだろう？　そらそらぁ！」
引きつった声をあげて苦悶する幼馴染みをあざ笑うかのように、堕ちた女騎士は膝の突き上げを強める。
グリッ、ギチュッ、ぐりゅっ、ぐりぐりぐりっ！
漆黒のアーマーに包まれた堕天騎士の膝が、フィオナの柔らかなワレメを容赦なく割り開いて食い込み、性器全体を強烈に圧迫して上下に揺すり責めた。
「あひぃぃぃぃ！　壊れちゃウッ、わたくしの……アソコが、潰れちゃうぅぅッ！　うあぁぁぁぁんっ！」
ふっくらと柔らかな大陰唇が限界まで割り開かれて膝アーマーに貼りつき、包皮に包まれた陰核が、グリッ、グリッ、と今にも押し潰されてしまいそうに抉り転がされる。
「オマンコはそう簡単には潰れやしないさ。そおら、もっともっと激しく突き上げてやるぞ！」
騎士として鍛え上げられた太腿の筋肉を躍動させ、セリーヌは姫の裸身を容赦なく跳ね上げた。
「やぁぁっ、ダメぇ、そんなに激しくしたら、ダメぇぇぇぇぇ〜ッ！」
反射的に太腿を閉じあわせ、股間を責める膝の動きを少しでも和らげようとするフィオナであったが、その程度で女騎士の動きを封じられるはずもなかった。
「そうそう。暴れ馬に乗る時には、そうやって太腿でしっかりと馬体を挟み込んで安定させるんだ」
親友の太腿が膝頭を締めつけてくる感触に目を細めながら、セリーヌは膝の突き上げを強める。
ずむっ、ずむんっ！　ぐりぐりぐりぐりぃぃぃッ！
膝頭に跨がったフィオナの裸身を完全に浮き上がらせて、容赦のない性器責めはサディスティックな熱を帯びてゆく。
「くぁ！　あぐうぅぅぅンッ！　アッ、はむうぅぅ、ンッ！」
黒い瘴気の壁に四方を囲まれ、白い湯気が充満した湯あみ場に、苦痛でくぐもった姫の呻き声が響く。
「いい声だ。苦痛にわななく肌の舐め心地も実にいい……お前の汗は果実のような香りがして、甘露のような味がするんだな」
セリーヌは、仰け反り苦悶するフィ

オナの喉元を舐め回し、唇を吸いつかせて、柔肌に噴き出た汗粒を舐め取りながら、股責めを続ける。
「くはぁぁんっ！　セリーヌッ、もう、やめてぇ、くあぁぁンッ！」
「何を言う？　これはまだ、前戯にすぎないんだぞ。本番はこれからだというのに……」
女騎士の屈強な膝の上で、全裸の姫は上下左右に揺さぶられ、秘部を抉り責められて煩悶を強いられた。
「フィオナよ、こうしていると、子供の頃の木馬遊びを思い出すな」
「んぐうぅぅ、なっ、何を!?」
唐突に子供時代の思い出話を切り出され、フィオナは脂汗に濡れた顔をギクリ、と強ばらせる。
「覚えているだろう。木馬に跨って、身体を上下に跳ねさせて、競争したじゃないか、こういう風になッ！」
ずんっ！　ずんっ、ずむんっ、ずむんっ！
秘部にめり込んだ膝の動きがさらに激しさを増す。
パックリと割り開かれた大陰唇の狭間に、黒いアーマーが容赦なくめり込み、膣全体が歪にひしゃげて、希望の子を宿した子宮にまで狂おしい圧迫感を伝えてくる。
「駈けろよお馬♪　野を越え山越えどこまでも～♪」
子供時代に一緒に歌った乗馬の歌を口ずさみながら膝を跳ね上げるセリーヌの顔には、楽しげな笑みが浮かんでいた。
「くぁ！　あがぁぁんっ！　ひぎっ、いっ、ヒッ、んあぁぁぁンッ！」
フィオナのあげる苦悶の声が、断末魔の絶叫のような響きを帯びてくる。
「……そういえば、あの頃からお前は木馬遊びの後、いつも頬を紅潮させていたな。子供の頃からオマンコを圧迫して気持ちよくなっていたのだろう？」
幼き日の思い出さえも、辱悦を煽る手段として用いたセリーヌは、膝の躍動をわずかに弱め、幼馴染みである姫を言葉責めで玩弄する。
「そっ、そんな、ちっ、違いますッ！　くあぁぁぁ、痛いッ、お願い、もう、やっ、やめてぇぇ！」
汗と涙の飛沫を周囲に振りまきながら、フィオナは闇に堕ちた幼馴染みの膝上で悶え泣いてしまう。
「そう言いながら、お前の身体は熱く火照り疼いているじゃないか。そら、暴れ馬を見事に乗りこなしてみせろ！」
上下動に、円を描くようなグラインドも交えて、堕天騎士は幼馴染みの秘部をこね回した。
ぐりゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ、ちゅぶっ、ぬちゅ、ぬちゅ、くちゅ、ぐちゅるっ……。
膝アーマーをめり込まされたフィオナの股間から、卑猥な蜜鳴りの音があがり始める。
「んふぁ！　あ……ひぐっ、んひぃぃ……あひんっ！　やっ、アッ、あんッ！」
白く立ち込めた湯気を、透き通った嬌声が震わせ、甘酸っぱい淫蜜の媚香が、ムワッ、と熱い湿り気を帯びて匂い立った。
「おや？　この音とぬめり、それに卑猥な匂いは……フフッ、フィオナよ、これは大洪水だな。私の膝が、お前の愛液でぐしょ濡れだぞ」
セリーヌの恥ずかしい指摘通り、フィオナの秘裂奥から溢れ出た大量の恥液は、黒い堕天装甲に包まれた美脚を舐めるようにトロトロと伝い流れてゆく。
「はぐうぅぅんっ、ああッ、あ、くふうぅぅうんんっ！」
膣奥から熱い愛液が溢れ出してくるのを感じながら、フィオナはもうひとつの切迫感と戦っていた。
（オシッコが漏れそう……このまま続けられたら、漏れちゃうッ！）
秘部にめり込んだ膝は、膀胱も押し潰してしまいそうに圧迫しており、狂おしいほどの尿意で姫を煩悶させる。
これ以上の恥辱を味わいたくないフィオナは、下唇に前歯を食い込ませてキュッ、と噛みしめ、救いを求めるような視線を宙に彷徨わせて、込み上げてくる尿意に抗う。
「フフフッ、フィオナ、お前がそういう表情をする時は、トイレに行きたいのをガマンしている時だ」
彼女を幼い頃から知っていて、互いの癖や仕草を熟知しているセリーヌが、図星を突いてきた。
「まさか、クソを漏らしそうなんじゃあるまいな？　私の膝をクソまみれにするのだけは、いくら幼馴染みといえども許さないぞ！」
嘲りの声をかけながらも、秘部を突き上げ、責め立てる膝の動きは止まらない。
「ちっ、違いますッ！　ふあぁぁぁぁ、もう、もう……漏れ……ちゃうぅぅぅッ！」
ガマンの限界に達したフィオナの裸身が、ギクギクンッ！　と緊張し、耐えようとする意思に反して、尿道括約筋が決壊した。
ちゅろろろっ、ぷしっ、ぷしいいっ！
ぷっしゃぁぁぁぁ～ッ！
膝頭をめり込まされた秘部から、失禁の尿水が勢いよく噴き出し、四方に飛沫を散らす。
湯気の中を漂う愛液の匂いに、甘ったるい尿臭が混じった。
「おやおやぁ、愛液の次はオシッコをお漏らしか？　まったく、仕方がない姫様だな。私の脚がびしょ濡れじゃないか！」
温かな尿水が膝頭を濡らし、ふくらはぎを伝う感触に心地よさげな表情を浮かべながら、堕天騎士は失禁姫を叱りつける。
「きゅうぅぅっ、止まらない……あぁぁ、出ちゃうぅぅッ！」
ぱしゃ、ぱしゃぱしゃぱしゃぴちゃ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/